

# ヨーロッパにおける最初の日本のイメージ

## - ポルトガルでの天正遣欧少年使節 -

ファティマ・レイ

### 1. はじめに

本研究の対象は、「天正遣欧少年使節」、(以下、「天正少年使節」或いは「天正使節」と呼ぶ<sup>1)</sup>)である。「天正使節」とは、日本とポルトガルの関係及び日本におけるキリスト教の布教活動に務めていたイエズス会<sup>2)</sup>宣教師の活動の成果により、16世紀末にヨーロッパに派遣された使節のことである。この天正使節は16世紀半ばに始まった日葡関係に直接関係していると同時に、16世紀から17世紀にかけてポルトガルとキリスト教の影響を最も大きく受けた九州の歴史的な一大イベントでもある。

この天正使節については様々な先行研究(例 松田2001; 結城1990など)があるが、本稿では日葡関係にとって重要なこのエピソードについて改めて見直す。また、500年あまりにわたるポルトガルと日本の絆が再び強化されることを願い、日本では未だ知られていない新たな情報を提供するため、主にポルトガルでのこの天正少年使節の行動及び旅について調べる。また、この使節が残した社会的・文化的な影響とともに、日本人と思われる人物が描かれているヨーロッパにおける最初の宗教画がポルトガルに現存することについても言及する。

### 2. 日葡関係の始まりと当時の日本の政治状況

1543年にポルトガル船が種子島に入港したことが、ポルトガル人によって確立された、東アジアにおける最も古い国際関係の一つである日葡関係の始まりとなった。また、それは日本と欧州諸国の最初の接触でもあった。ポルトガル人は日本人が接触した最初のヨーロッパ人であったため、両国民の間に自然に生じた友情や全く異なる文化への日本人の好奇心や感心などは、日本におけるポルトガル人の初期の成功の要因となったと考えられる。

当時日本は戦国時代であったため、国内でのポルトガル人の動きは限られていた。従って、ポルトガル商人に続き、日本に渡来したイエズス会宣教師<sup>3)</sup>(以下、イエズス会士と呼ぶ)は主に九州内で活動を行っていた。16世紀のポルトガル人との遭遇は、日本の統一とその時代の日本人のアイデンティティの構造にも重要な影響を与えた<sup>4)</sup>(Carvalho 2000)。

1549年にイエズス会士のフランシスコ・ザビエル<sup>5)</sup>が日本で布教活動を始め、彼を含む宣教師の活動により何千人もの日本人がキリスト教へ改宗した。フランシスコ・ザビエルは日本で歓迎され、イエズス会の布教の使命を果たしたが、その後キリスト教が快く受け入れられたり、キリスト教への改宗の全てが真に宗教的感情に触発されたものであったりしたとは言えない状況であった<sup>6)</sup>。

ポルトガル人の商人は歓迎されて貿易も成功した<sup>7)</sup>が、イエズス会士の場合は異なっていた。

貿易の状況と影響を理解していた宣教師はキリスト教を広め、人々を改宗させるため、貿易の必要性を利用することにした。商人と宣教師はお互いの活動を補足し合った。宗教に関係なく、多くの大名の南蛮貿易の仲介としてイエズス会士が動いたことも知られている<sup>8</sup>。

## 2.1. 日葡関係へのイエズス会宣教師の影響

イエズス会士はポルトガル商人と共に日本に渡来し、日葡関係にとって重要な役割を果たした。彼らは農民から大名までの様々な階級の人々と接触したため、その活動は宗教に限らず、文化的・言語的交流<sup>9</sup>と政治的・社会的な環境などにも影響力を持っていた (Jaca 2005)。また、日本とヨーロッパの間で伝えられていた情報も、ほとんどのものが彼らから発信されたものであった。

## 3. 大名のキリスト教への改宗とその利益

### 3.1. 日本側

15世紀末から16世紀末にかけて日本は戦国時代であったため、内乱の時代を生きていた諸大名は自身の政治的及び社会的立場を強化しようとしていた。ポルトガルの商人が新しい軍事技術やそれまで日本に存在しなかった鉄砲を導入したり、富をもたらす海外との貿易を盛んにしたりしたので、これが大名の勢力を拡大するのに大変役立ったのである。

宗教的には、日本全体の統治者がいなかったため、ある土地で布教活動に失敗しても、隣の土地で成功するといったケースが多くあった。改宗した人々の情熱はそれまで育ってきた伝統文化への思い入れよりも強く、他の宗教と対立するようになった場合もあった<sup>10</sup>。

### 3.2. ポルトガル側

イエズス会士の日本における布教活動は、イエズス会のヨーロッパ向けの一大宣伝としての役割も担っていた。この時期、ポルトガル王国の布教権、東洋のパドロアード<sup>11</sup>にとって日本での布教活動がもっとも緊要なものとされていた。

また、日本にいたポルトガル人にとって、特定の大名に肩入れすることは重要なことであった。大名が内乱で勝利を収めればポルトガルの影響力も増加し、そこに関係しているポルトガル商人にも富をもたらすからである。

## 4. 九州の大名のキリスト教への改宗 - 大村純忠・大友宗麟・有馬晴信<sup>12</sup>

九州においては、顕著な布教活動を通じてキリスト教へ改宗した者が被支配者階級だけでなく、支配者階級であった大名の中にも数名いた。この章では、これらの改宗に関わる事実のうち、キリスト教に対する大名の視点に影響を与えた大名とイエズス会士との関係について述べる。

イエズス会士アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父<sup>13</sup>と協力してポルトガル国王と教皇に使節団を送ったのは、大村純忠(1563年受洗・洗礼名バルトロメウ・デ・オオムラ)、大友宗麟(1578年受洗・洗礼名フランシスコ・デ・ブンゴ)、及び有馬晴信(1580年受洗・洗礼名プロタジオ・デ・アリマ)の3人のキリシタン大名であった。キリスト教へ改宗した大名

は他にもいたが、本稿では、天正遣欧少年使節に直接関係しているこの3人の改宗についてのみ述べる。

#### 4.1. 大村純忠（ドン・バルトロメウ）

1561年、ポルトガルの船が大村純忠(1533～1587)<sup>14</sup>の領内の横瀬浦<sup>15</sup>に寄港した。この地でポルトガル人は歓迎され、純忠に教会の建設を許された。更に、10年間税も免除された(Carvalho 2000)。1563年に純忠は家臣と共にコスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け、ポルトガル人に横瀬浦の提供を申し出た。横瀬浦はポルトガル人にとって重要な港となった<sup>16</sup>。

大村領内での統治力・軍事力の弱体化とイエズス会士が南蛮商人に対して大きな影響力を持っていることを知った純忠は、宣教師への接近に利点を見いだした。純忠はこの関係がいずれ武器の供給と自領の商業的繁栄に繋がることを信じていた。

イエズス会の視点からは、大村純忠の弱点と武器の必要性が大村領内での活動の保証となっていた。ポルトガル商人がもたらした製品や武器などを手に入れることができると、純忠は宣教師に保護と支援を保証した。

ポルトガル人が渡来した当初は、大村純忠のキリスト教への関心は非常に薄かったと考えられている。ところが、1563年にはこの大名の洗礼に繋がるイエズス会との二度目の接触があったのである<sup>17</sup>。同年6月初め、純忠は宣教責任者コスメ・デ・トーレス神父から洗礼を受け<sup>18</sup>、洗礼名を「ドン・バルトロメウ」と名乗った。しかし、キリスト教に改宗はしたが、大村領内の仏教寺院の破壊は禁止した。この命令に従わなければ、イエズス会士とその活動への援助は停止されたであろう。

1563年の夏、隣国の後藤貴明<sup>19</sup>との戦争が始まり<sup>20</sup>、大村全領土に広がったため、大村の町と横瀬浦は破壊され、純忠は多良岳に逃れた。この戦争のため、大村純忠は2年間イエズス会士と接触しなかったのだが、商人との関係や貿易はこの間も続けていた(Ribeiro 2006)。

1565年、横瀬浦の破壊の2年後、大村純忠は福田港を開港してポルトガルに提供したが、不便な港であったために60年代末に長崎港が開港された。1571年から長崎は大抵の商船が寄港できる港となった。

1560年代の大村領内における宣教師の活動は、最初に横瀬浦、その後福田と長崎、そして純忠が住んでいた大村の町に限られていた。港で商人を援助すると同時に宣教師はその地の人々の改宗も行っていた。特に大村の町は、1568年12月に宣教師とそこを訪れた宣教責任者コスメ・デ・トーレスが大きな関心を示した。大村純忠の許可を得たトーレス神父は、大村家の屋敷の近くに教会を建て、そこで領民の改宗を行った。

大村純忠の改宗から7年後、1570年に純忠の母親や妻、子供及びその他の親族の洗礼も行われた。この時期、大村内の長崎や他の町でも日本初の大勢の同時改宗が行われた(Ribeiro 2006)。

#### 4.2. 大友宗麟（ドン・フランシスコ）

常に商人と行動を共にしていたイエズス会士との接触後、豊後の大名大友宗麟(1530～1587)はインドの知事及びポルトガルの君主たちとの外交を開始した。宗麟にとっては、外国の文明・文化への関心とポルトガル人の影響を受けていた外国の地への関心が相まって、この外交関係は商業的な意味を持っていた。宗麟自身もこの商業による利害関係を否定しなかった。

府内<sup>21</sup>におけるポルトガル商船の寄港は1544年に遡る。しかし、この町の港の位置は、中国から来航した船にとって九州の海岸の大部分を周らなければならなかったもので不便であった。それにもかかわらず、50年代において豊後領内で停泊するポルトガル船は少なくなかった。

1551年10月、フランシスコ・ザビエルが府内を訪れ、大友宗麟に謁見する。しかし、ザビエルがほとんどの人的資源を山口に集中したため、府内でイエズス会士を定住させるという宗麟の望みはすぐには叶わなかった。

1553年の初め、府内でイエズス会の使命である布教活動が公式に認められ、1556年に宣教責任者コスメ・デ・トーレスがこの地に住むようになったため、府内は布教活動の中心となった。1565年、大友宗麟の住む臼杵を含む豊後領内でイエズス会の最後の布教活動が行われた。しかし、それ以前の1562年に宗麟のキリスト教への関心の欠如に失望し、その洗礼の実現性を疑ったトーレス神父は豊後を去っていた。

大友宗麟自身の洗礼は1578年8月に宣教師フランシスコ・カブラルによって行われ、洗礼名を「ドン・フランシスコ」とされた。この大名は正式にキリスト教徒となったのである。しかし、宗麟の洗礼は九州の他の地域の場合と異なり、その家族や豊後領内の何千人もの人々の改宗にはほとんど影響を与えなかったのである。

宗麟の洗礼の後、豊後におけるキリスト教の普及は新たな勢いを得た。特に、1585年から1587年7月にかけては、武家や一部の領民を対象としたイエズス会の活動にとって有益な期間であった。

#### 4.3. 有馬晴信(ドン・プロタジオ)

有馬領内におけるイエズス会士の入領は大名有馬義貞<sup>22</sup>と島原の領主<sup>23</sup>の要請で行われた。有馬義貞の宣教師との最初の接触は1561年以降であり、隣の大村領土におけるイエズス会の活動とほぼ同時期であった。しかし、大村純忠が直に1563年に洗礼を受けたのに対し、有馬義貞は1576年になってようやく洗礼を受けた。

大村と同様に、島原と口之津におけるイエズス会士の入領と布教活動の許可は、有馬領内で貿易の利益を得るという義貞の欲望が動機であった。

横瀬浦が破壊された1563年から長崎が貿易と布教活動の中心地となった1571年にかけて、口之津はイエズス会士にとって重要な役割を果たした。有馬義貞の後継者有馬晴信(1567～1612)が洗礼を受けた1580年まで、布教活動が領内の島原と口之津の二か所でしか許可されていなかったからである。

イエズス会士は10年以上もの間有馬義貞の洗礼を行うことを希望していたにもかかわらず、それは1576年4月になって初めて実現した。義貞の洗礼後、その妻と有馬家の数名

も洗礼を受けた。その中には千々石直員<sup>24</sup>という人物もいた。洗礼は、有馬家に続き、家臣に対しても行われた。

しかしながら、有馬義貞の跡継ぎ有馬晴信が洗礼を受けなかったことは否定できない事実であった。これは遠からず有馬領内における布教活動にとって脅威となるものであった。義貞の死後、キリスト教へ改宗した人々の大部分がキリスト教を棄教したが、これは同時に大勢の改宗が行われたことに無理があったということを示していると思われる<sup>25</sup>。また、大名となった有馬晴信の指示でその領内における布教活動も禁止された<sup>26</sup>。

その後、アレサンドロ・ヴァリニャーノの介入により有馬領内の布教活動は再開され、1578年に有馬晴信はキリスト教徒への迫害をやめ、晴信自身を含む多くの人々が改宗した。その後はイエズス会士は妨害を受けず、それどころか、晴信から多少の援助も受けて布教活動が続けられた<sup>27</sup>。

この時期、有馬晴信が叔父の大村純忠と政治的・軍事的な同盟<sup>28</sup>を確立するために、有馬領内から追放した人々を仲介として利用したと考えると、当初キリスト教徒を迫害していたこの大名のキリスト教に対しての行動の変化を理解することができるであろう（Ribeiro 2006）。

大村との同盟は失敗したが、1579年に肥前大名であった竜造寺孝信と戦うため、晴信は宣教師とヴァリニャーノを仲介として南蛮人を味方にし、彼らに軍事支援を求める。1580年に大名有馬晴信は洗礼を受け、洗礼名を「ドン・プロタジオ」と名乗りはじめる。

## 5. 天正遣欧少年使節

### 5.1. 着想と目的

日本におけるキリスト教の布教活動は、初期においてはある程度の成功を収めており、日本国外へ届けられた宣教師の手紙によると、数年のうちに日本全土で改宗が成功裏に進むものと思われていた。しかし、宣教師の説く質素や謙虚というキリスト教の価値観は、当時の日本の身分の高い人々にとって魅力あるものではなかったのであろう。そのため、最初に教えが広まったのは、そのような身分の高い人々ではなく、人間としての尊厳や身分の貴賤を問わない新たな考え方を受け入れた人々、イエズス会の運営する病院や仁慈堂<sup>29</sup>などの恩恵を受けた身分の低い人々の間であった。

また、日本から遠く離れたヨーロッパの現実を知らない日本人にとって、その地に自国の文化とは異なるが、別の豊かで社会的に公平で、より進んだ文化が存在するということは理解しがたいことだったのであろう。この社会的公平さは、身分の低い人々を援助したキリスト教の活動により実現していたものであるが、更にヨーロッパではカトリックとその教会が重要な役割を果たしているということなども全く思いもよらないことであったと思われる。

この時期、アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父がイエズス会の巡察師として初めて来日した。ヴァリニャーノ神父がその前に読んでいた手紙によると日本での布教活動は成果を上げているとのことであり、彼もそれを信じていた。しかし、実際に日本を訪れたとき、現実には手紙通りではないということが分かった。

ヴァリニャーノの考えでは、イエズス会の布教活動の障害の原因はカトリック信仰を伝え

ちが直接得られるヨーロッパの情報や知識の方が発信される情報の信憑性に必要であった。

## 5.2. 天正使節の重要性

戦国時代にあつて各地で戦いが続いており、政治的・経済的に不安定であつた日本においてイエズス会の宣教師は重要な役割を果たしていた。彼らは、日本とポルトガル及びポルトガルが影響力を持っていた様々な地域で日本の大名を含む様々な人々とポルトガルの君主や商人などの間の仲介を務めていた。他方、日本の戦国大名は、自身の政治権力と軍事力を強化して戦いで勝利するために西洋人と接触して彼らを味方につけ、また、ポルトガルとの貿易によって必要な武器、弾薬を含む富を得ることを望んでいたのである。従つて、この天正使節の派遣を通じて、西洋と東洋の間の政治的・経済的な関係が強化されたのである。

一方、ヨーロッパにおいて一大センセーションを巻き起こした日本からの使節団の渡航は、大いなる宗教的性格とともに政治的、外交的及び経済的要素をも帯びていたことがわかる。当時、ヨーロッパにとって、この少人数の使節団は日本を知りうる唯一の存在であるとともにヨーロッパ各国の習慣であつた教皇への服従を表す使命をも担っていたのである（サルゲイロ 2014）。

## 5.3. 天正使節の構成員と準備

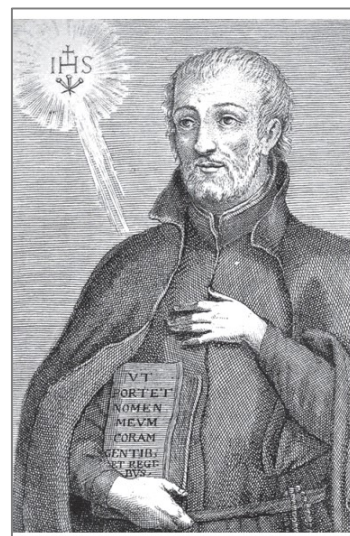
### 5.3.1. 天正使節団の主な構成員

#### － イエズス会の巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノ

イエズス会東インド管区の巡察師アレサンドロ・ヴァリニャーノ神父は1539年2月15日にイタリアのキエーティに生まれ、1606年1月20日にマカオで没した。ヴァリニャーノは、東洋におけるポルトガルのカトリックの布教保護権<sup>31</sup>の歴史上、最も重要な人物の一人であつた。

「この分野の研究者の多くは、1500年代の東アジアにおいて聖フランシスコ・ザビエルに次ぐキリスト教活動の最重要人物と見なしています。」（サルゲイロ 2014 p. 52）。

ヴァリニャーノ神父の残した文章から、それまでのイエズス会の神父が出会った人々と全く異なる道徳的・政治的・文化的な背景を持った日本社会に対する彼の特段の理解と敬意が読み取れる<sup>32</sup>。



1 アレサンドロ・ヴァリニャーノ

## － 天正使節の4人の少年達

3人のキリシタン大名によって使節に選ばれた4人の少年達は、1580年にヴァリニャーノが創立したキリスト教徒のための有馬神学校<sup>33</sup>の生徒で、日本の武士階級の出身であった。この4人とは伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ及び中浦ジュリアンである<sup>34</sup>。

### 伊東マンショ（ドン・マンショ）（12歳）：

豊後の大名大友宗麟の甥で、天正使節の正使の一人であった。マンショ（満所）は洗礼名であり、本名は伊東祐益(いとうすけます)である。

### 千々石ミゲル（ドン・ミゲル）（14歳）：

大名有馬晴信の従兄弟にして大名大村純忠の甥でもあった。伊東マンショと同じく天正使節の正使の一人であった。ミゲル（弥解留）は洗礼名であり、本名は千々石紀員(ちじわのりかず)<sup>35</sup>、通称千々石清左衛門(ちじわせいざえもん)。

### 原マルチノ（ドン・マルチノ）（13歳）：

マルチノはジュリアンと同じく大村家家臣の家系であったといわれ、天正使節の副使の一人であった。マルチノ（丸知野）は洗礼名であり、本名は未だ不明である<sup>36</sup>。ローマに残されている資料によると肥前<sup>37</sup>出身とされており、大村領の名士、原中務の子息。両親共にキリスト教徒であり、司祭を志して有馬神学校に入ったのである。

### 中浦ジュリアン（ドン・ジュリアン）（12歳）：

ジュリアンはマルチノと同じく大村家家臣の家系であって、天正使節の副使の一人であった。ジュリアン(寿理安)は洗礼名であり、本名は小佐々甚吾(こさざ じんご)（サルゲイロ2014）。



2 少年達の像、大村市

## － ディオゴ・デ・メスキータ

ディオゴ・デ・メスキータはポルトガルのメザオン・フリオ出身で、安土神学校の講師であった。メスキータはその優れた日本語能力により、天正使節の参加者として少年達の指導役兼通訳を任された。（サルゲイロ 2014）

## － ヌノ・ロドリゲス

イエズス会インド前管区長のヌノ・ロドリゲスは、ヴァリニャーノ神父が使節団のインド滞在の際にインド管区長に任命され、使節団を離れることになったため、この使節団のリーダーに任命される。

## － その他

日本人ジョルジュ・デ・ロヨラ修道士<sup>38</sup>と諫早出身のカテキスタ<sup>39</sup>のコンスタンティノ・ドラードという日本人が天正使節の随員として選ばれた。

「この二人は、グラフィックス・アートを専攻し、活版印刷の技術をポルトガルで学び、日本人初の印刷職人としてキリシタン版などのポルトガルミッションに関する出版物を



世に送り出しました。」（サルゲイロ 2014 p. 60）

さらに、オリヴェリオ・トスカネーリ修道士とアゴスティーニョと呼ばれる使用人も天正使節に同行した（サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862）。

### 5.3.2. 天正使節の準備

#### 正副使の選択：

九州各地から集まった有馬神学校の生徒の中から選ばれたマンショ、ミゲル、マルチノ及びジュリアンの4人は、さらにキリシタン大名の親戚でもあった。このため、彼等はヨーロッパへ派遣される天正使節の代表として選ばれたのである。

しかし、ヴァリニャーノ神父が4人の少年達を使節として選んだ理由は、若者の方がヨーロッパへの過酷な旅に耐えうるであろうという判断によるものであった（サルゲイロ 2014; Moura 1968-69）。また、サルゲイロ（2014）によると、ヴァリニャーノ神父は感受性の鋭い若者なら統率しやすいと思っていたのではないかと推察される。

#### 天正使節の旅の構想：

イエズス会及びアレサンドロ・ヴァリニャーノ巡察師はヨーロッパ訪問に先立ち、訪問先を厳しく精査し、使節たちに伝えるべき情報を考えていた。

少年達一行にヨーロッパが文化的・社会的のみならず経済的・宗教的にも優れていることを感じさせるため、ディオゴ・デ・メスキータ神父もヴァリニャーノ巡察師から使節たちがヨーロッパ各国の宮廷で歓迎されるべき方法について厳しく指示されていたのである。

## 6. 天正少年使節の旅（1582年～1590年）

### 6.1. 長崎からリスボンへ<sup>40</sup>

使節団は1582年2月20日にポルトガル人イナシオ・デ・リマの商船で長崎港から出帆し、ヨーロッパへの長い旅を始めた。第一の区間はマカオまでであった。マカオまでの旅は短いものであったが、非常に厳しく、少年達も船酔いに悩まされた。

3月9日マカオに到着し、レオナルド・デ・サ司教やジョアオン・デ・アルメイダ総司令官、その他のイエズス会士などに迎えられた。この地で風待ちのため約10か月滞在した。その間、少年達は音楽を勉強し、ディオゴ・デ・メスキータ神父は彼らが日本で始めた有馬神学校の授業を引き続き行った。なお、少年達はヨーロッパまでの旅でポルトガル語<sup>41</sup>、ラテン語、スペイン語も勉強したようである（サルゲイロ 2014）。

数か月後、使節団はマカオを出発してインドへ向かった。マラッカからインドまでの間にメスキータ神父と伊東マンショが重い病気になり、また、長旅であったため食料と水も少なくなかった。しかし、使節団が乗った船は先へ進み、セイロン島<sup>42</sup>のコロンボ港を経てインドのコモリン岬へ向かった。



3 南蛮船



その後使節団はインド東海岸のコスタ・ダ・ペスカリーア<sup>43</sup>に数日間滞在した。メスキータと他の病人が治療のためにトゥティコリンにいる間、使節たちはトリンシャドゥラとマナバルを訪れた。次に使節団は陸路でインド西海岸のクーランに至った。クーランではコチンまでの船に乗り、翌日1583年4月7日コチンに到着した。コチンで約6か月間滞在し、その後ゴアへ向かった。

使節団はゴアではインド総督に迎えられ、豊後、有馬、大村の各大名からの書簡を彼に渡した。ゴア滞在中、ヴァリニャーノ神父がインド管区長に任命されたため、ヌノ・ロドリゲスが代わりに使節団とローマまで行くことになった。数日後、使節団はゴアでヴァリニャーノと別れてコチンへ戻り、1584年2月20日ヨーロッパ行きの船に乗った。

5月10日喜望峰を通過し<sup>44</sup>、16日後サンタ・エレーナ島に到着した。この島で11日間休息し、旅の最終段階の準備をした。8月初め、テージョ川を遡ってポルトガル王国の首都リスボンに到着し、ヨーロッパまでの旅はここで終了した。

## 7. ポルトガルにおける天正遣欧少年使節<sup>45</sup>

### 7.1. リスボンとシントラ<sup>46</sup>

使節団はポルトガルのテージョ川河口にあって、リスボンに近いカスカイスに投錨し、一泊した<sup>47</sup>。翌日、有名なポルトガル王国の首都リスボンの港へ移動した。少年達はこの港の規模とそこに停泊していた船の数に大変驚いたようである。

リスボンではイエズス会本部のサオン・ロケ教会<sup>48</sup>に宿泊した。この時期、ヌノ・ロドリゲスが短期間使節団から離れてマドリッドへ行ったため、少年達はディオゴ・デ・メスキータとセバスティアオン・デ・モラエス神父と一緒にリスボンに滞在することになった。そこでは枢機卿アルベルト・デ・アウストリア<sup>49</sup>に迎えられ、リスボン大司教ジョルジェ・デ・アルメイダやイタリアの高名な神学者フレイ・ルイス・デ・グラナダといった要人にも紹介された。どこへ行っても少年達は実の息子であるかのような大歓迎を受けた。



4 サオン・ロケ教会

翌日<sup>50</sup>、使節団は枢機卿アルベルトの馬車でリスボンの町を見物して回った。現在の観光客のように、ベレン塔や他の有名な観光地なども訪れた。

次の日はリスボン郊外のシントラの近くにあるペニャ・ロンガ修道院を訪問した。その後、枢機卿アルベルトに招かれ、使節はシントラ王宮を訪れた。そこでは食事に驚かされたが、それは、使節のために特別に用意された豪華な肉料理であったからだ。少年達はこのような食事に慣れていなかったため、あまり食べることができなかったと思われる（志岐 2010）。この会食に出席するにあたり、4人は日本の伝統衣装である着物を着た。食事後はペニャ・ロンガ修道院に戻り、そこで宿泊した。

シントラからはリスボンに戻り、1584年9月5日徒歩でリスボンのサオン・ロケ教会からマドリッドに向けて出発した。リスボンから直接マドリッドへ行く予定であったのだが、

使節団がリスボンにいることを知ったエヴォラの大司教テオトニオ・デ・ブラガンサに招かれて使節たちはエヴォラとヴィラ・ヴィソーザに立ち寄った。

## 7.2. モンテモール・オ・ノヴォ

使節団はリスボンを出てテージョ川を渡り、アレンテージョ地方を数日間旅してモンテモール・オ・ノヴォという町に到着した。この町に入る少し手前でエヴォラの大司教の執事に迎えられた。執事は大司教の命により馬車で迎えに来ていたのである。(Sande 2009)

モンテモールでは宿舎が用意されていたので、使節団はそこで食事し、一泊した。食事の際に一人の僧侶がエヴォラの大司教の代わりに使節達を歓迎し、大司教からのメッセージを伝えた。それに応えて伊東マンショが使節団の代表として感謝の言葉を述べた。翌朝少年達はミサに出席するために午前3時前に起床した。ミサの後で朝食を取り、すぐにエヴォラへ向かった。

## 7.3. エヴォラ<sup>51</sup>

使節団はモンテモールを出発した日<sup>52</sup>の午前10時頃エヴォラに到着した。イエズス会のエスピリト・サント学院<sup>53</sup>の神父と修道士達に迎えられ、その学院で宿泊した。使節団の到着を知ったテオトニオ大司教は、彼らに食事を振る舞うように指示し、その後も彼らのエヴォラ滞在の間、毎日食事の用意を指示したのである。

使節団が到着した日、テオトニオ・デ・ブラガンサ大司教は少年達を迎え、4人を抱擁し、祝福した。大司

教はその後

少年達と一緒にエスピリト・サント学院でその日の午後を過ごした。そこで使節は学生と総長にも歓迎され、大学の授業も参観した。また、町の修道院の訪問の際は、常に大司教が使節団のために自身の馬車を提供した(Sande 2009)。



6 エスピリト・サント学院

使節団はこの町で7日或いは8日間滞在した。この間、少年達は様々な楽器を弾き、ヨーロッパで最も大規模なオルガンの一つと言われていたエヴォラ大聖堂のオルガンを弾く機会もあった(サルゲイロ 2014)。



5 エヴォラ、16世紀



7 エヴォラの大聖堂

9月14日が十字架挙栄祭<sup>54</sup>であったため、使節団はテオトニオ大司教の願いでその日までエヴォラに滞在した。当日少年達はエヴォラ大聖堂のミサに行き、その後大司教と共に聖体行列<sup>55</sup>に参加した。日本の少年達が行列に混じって歩いているのを見て、町の多くの人々は彼らを祝福し、中には大変感動して涙まで流す者もいたようだ。聖体行列が終わると、大司教は4人を自身の礼拝堂<sup>56</sup>に招き、タペストリー<sup>57</sup>や祭壇の装飾品、高価な品々と共に旅費として1000クルザード<sup>58</sup>を贈った。また、大司教個人の書庫では少年達に数々の地図や書物なども見せた<sup>59</sup>（サルゲイロ2014）。

サルゲイロ（2014）によると、使節は大司教の家で最後の食事をしたが、その際貧民12人も招待されて同席していた。使節達はこれに大変感動し、そのような慈悲と思いやりの行為を目撃したことを喜んだ。その後エヴォラ大聖堂まで行き、伊東マンショと千々石ミゲルが大聖堂のオルガンを演奏した。

エヴォラ出発の前に使節団はテオトニオ大司教を招待し、日本の着物や日本式の挨拶などを披露した。また、日本で記された書物や織田信長（1534～1582年）の書簡なども見せたが、中でも大司教が最も感動したのは、少年達が旅の間に覚えたラテン語で記したノートなどであった。日本から持参した品物もいくつか



8 エヴォラ大聖堂のオルガン

テオトニオ大司教に贈り物として渡そうとしたが、大司教は彼らがまだ多くの人物を訪問しなければならないという理由で、小さな箱一つしか受け取らなかったようである（Moura 1968-69）。

天正使節と日本におけるイエズス会の布教活動の成果に感動したテオトニオ大司教は、日本に新しい学校或いは神学校を作るための経済的援助を申し出た。さらに、ミサで使われる葡萄酒をインドからの輸入品に頼らず日本で製造できるように、修道士やブドウ栽培農家を日本へ派遣することを約束した（サルゲイロ 2014; Moura 1968-69; Sande 2009）。

9月14日、使節団はテオトニオ大司教に別れを告げ、馬車でヴィラ・ヴィソーザへ向けてエヴォラを出発した。

## 7.4. ヴィラ・ヴィソーザ

### – ヴィラ・ヴィソーザとブラガンサ公爵

ヴィラ・ヴィソーザは中世の古い町であったが、15世紀末からブラガンサ公の支配下で生まれ変わり、この時期のポルトガルにおける政治、経済、文化、軍事面の要所となっていた。ここは、実にポルトガルのヒューマニズム文化普及の中心地となっていたのである。

ブラガンサ家は、スペイン・ポルトガルが同君連合であった<sup>60</sup>16世紀後半からイベリア半島全土において最も重要な公爵家で、ヨーロッパの主要な公爵家の一つでもあった。国王の宮廷から離れた場所に位置していたにもかかわらず、宮廷の政治に少なからぬ影響力を持っていた（サルゲイロ 2014）。

ヴィラ・ヴィソーザはこのようなブラガンサ公爵の存在により社会的、文化的及び経済的に大きく発展していた。宮殿や教会、修道院などの建築物が訪問者の目を見張らせるほど豪

華な外観をこの町に与えていた。また、ブラガンサ家の住まいがあったので、数多くの使用人とその家族や貴族、騎士なども移住してきたため、人口構成も以前とはすっかり変わり、町は大きく発展したのである。

こうした背景の上に第7代ブラガンサ公テオドジョ2世とドナ・カタリーナ公爵夫人の存在があり、1584年に日本からの訪問者をこのような町で受け入れることになったのである。

#### － 第7代ブラガンサ公ドン・テオドジョ2世とブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナ

ドン・テオドジョ2世は天正少年使節の訪問の1年前、15歳で第7代ブラガンサ公に即位した。従って、使節団がヴィラ・ヴィソザを訪問した際には、彼は4人の使節達とほぼ同年齢<sup>61</sup>であった。父公爵が病気であったため、テオドジョ2世はわずか10歳の時、ブラガンサ家の800人の兵士と従者を率いてアルカセル・キビールの戦い<sup>62</sup>に出征する経験もしていた。

芸術を愛したテオドジョ2世の影響で、16世紀末にヴィラ・ヴィソザは音楽、文学、人文科学の中心地となった。また、ポルトガルがスペイン統治下にあっても、彼は公爵家の権威を持ってポルトガルらしさを守り抜き、スペイン国王フェリペ2世との関係にも実に巧みな政治手腕を発揮した。

テオドジョ2世の母親であるドナ・カタリーナ公爵夫人は、エヴォラの大司教ドン・テオトニオの親族であり、スペイン国王フェリペ2世の従妹でもあった<sup>63</sup>。この時期、ドナ・カタリーナ公爵夫人はポルトガル王国における政治面で最も重要な人物の一人であり、息子テオドジョが幼少であったので、後見人も務めていた。

#### 7.4.1. 天正少年使節のヴィラ・ヴィソザ訪問

1584年9月14日の夜、使節団はおそらくエヴォラとヴィラ・ヴィソザの間の地で宿泊したと考えられるが、これについては未だ資料が発見されていない。しかし彼らが9月15日の午後ヴィラ・ヴィソザに到着したことは確かな史実である。このヴィラ・ヴィソザへの訪問はエヴォラのテオトニオ大司教とドナ・カタリーナ・デ・ブラガンサ公爵夫人の要請で行われたものである。その目的については、先ずイエズス会側はブラガンサ公爵家への訪問を通じてヨーロッパ文化におけるカトリックの重要性を日本人に示したかったのである。一方、ブラガンサ家側は使節団の受け入れによってイベリア半島における威信と権力を示すことを望んだのであろう。つまり、この訪問はただの偶然の表敬訪問ではなかったと考えられる（サルゲイロ 2014）。

使節団はローマへ行く途中、この町で1584年9月15日から18日まで4日間滞在したが、天正使節のポルトガルにおける旅で最も重要な訪問だったと見られている。使節はローマからの帰途、再びこの町に立ち寄り、その際も4日間滞在している。（サルゲイロ 2014; Moura 1968-69）





9 サント・アゴスティーニョ修道院

往路、使節団が立ち寄った際、ブラガンサ公爵は使節団の到着を知らされていた。ドナ・カタリーナは彼らがヴィラ・ヴィソーザに着く前に公爵の馬車を彼らの迎えに遣わした。テオトニオ2世は兄弟達と共に町のサント（聖）・アゴスティーニョ修道院の入り口で使節団を迎えた。両者はそこでポルトガル語と日本語で挨拶を交わした。その後、使節団は公爵に主礼拝堂へ案内され、そこで行われた聖体ミサに出席した。ミサの終了後、使節団と

公爵は公爵宮殿に向かった。この宮殿の建築とその規模は日本の少年達を大変驚かせたと考えられる。公爵は中央階段のところで使節団を待ち、ドナ・カタリーナの控える部屋へ彼らを案内した。少年達はカタリーナの実の息子であるかのように大歓迎された。（サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862）

また、使節団のために用意されていた宿泊場所も金糸のタペストリーや絹でふんだんに飾られており、寝室にも少年達と二人の神父用の豪華に飾られたベッドが置かれていた（Moura 1968-69）。

礼拝堂で行われた式典の後、使節団は公爵とその兄弟や神父達との会食に招かれた。テオドジョ2世は伊東マンショが洋式の正餐の様子を観察できるように、彼には常に最も良い席を与えた。食事の際に使われていたのは豪華な銀食器であった。

「あまりにもゴージャスで素晴らしいご馳走だったため、食べるよりも驚きのほうが先に立ちました。」（サルゲイロ 2014 p. 112）

食堂も多く、金や銀の装飾で飾られており<sup>64</sup>、ブラガンサ家の使用人も食事の際には銀食器を使用していた。

使節団の随員の一人、日本人のコンスタンティノ・ドラードは好奇心が強くポルトガル語の筆記に優れていたため、ヴィラ・ヴィソーザで目にした様々なことを記録した。宮殿では特に厨房が印象的であったようだ。礼拝堂や素晴らしい宮殿の建築についてもドラードによる詳細な記録が残されている。（サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862）



10 公爵宮殿

ブラガンサ公爵は少年達の日本の伝統衣装である着物について聞きおよぶと、彼らがその着物を着て日本の正式な挨拶の仕方を披露することを望んだ。こうして、4人の少年達は着物姿で宮殿内を歩いた。その美しさに感心したドナ・カタリーナは大変褒め、特に帷子が一番気に入ったようである。

これが私的な儀式であったにもかかわらず、少年達が自室に戻る際には物見高い従者達が

部屋の前に集まっていたので、その人々にも少年達の姿が見えるようにドナ・カタリーナは松明を灯すように指示したのであった（Sande 2009）。

更に次のようなエピソードも残されている。ドナ・カタリーナはディオゴ・デ・メスキー

タ神父に依頼して少年達の着物一式を見る機会を得、次男のドン・ドゥアルテが祝祭などで着用できるよう使用人に同じような着物を仕立てさせた。翌朝、ドン・ドゥアルテにその着物を着せて、メスキータ神父に宮殿内に日本人がもう1人いると少年達に伝えさせた。着物を着たドン・ドゥアルテの姿を見て日本人はいささか驚いた。彼の着こなしは妙な個所が少々あったが、それは日本人の少年2人によって直された。ドナ・カタリーナは、息子が自身で着物を着られるように、日本人から正しい着付けの教えを受けた(サルゲイロ 2014; Moura 1968-69; Sande 2009)。

他にもヴィラ・ヴィソーザで目される場所は、使節団が狩りの際に訪れた狩猟施設であった<sup>65</sup>。

「後日おこなわれた馬上槍試合は、日本では珍しいものだったので使節団の興味を大いに引いたそうです。」(サルゲイロ 2014 p. 123)

このヴィラ・ヴィソーザ訪問の成功は、日本人とポルトガル人が様々な交流を通じた体験の共有からお互いに文化的変容を遂げていくプロセスの上に成り立ったことがわかる。また、ポルトガル人、特に子供達と日本の少年達の交流を通じて西洋と東洋が結ばれたのである。

この町で滞在した4日間、少年達はドナ・カタリーナに何度も招待されたが、それは彼女が4人を自分の息子のように思い、彼らとの会話を楽しんだからである。4人は楽器も得意であったので、公爵はチェンバロとヴィオラを自室に持ってこさせ、そこで彼らが演奏を披露した。この演奏は全員が大変感心するほどであった(サルゲイロ 2014)。

ヴィラ・ヴィソーザからの出発は10月18日となった。ドナ・カタリーナとテオドジョ2世に別れの挨拶と感謝の言葉を述べ、贈り物や旅費の援助を受けて、公爵の馬車でスペイン領近くのポルトガルの最後の町エルヴァスへ向かった。

次に、本稿の目的であるポルトガルにおける天正使節の旅の詳細についての記述から少々逸れるが、この旅路の重要な構成要素であるスペインとイタリアにおける天正使節の主な行動等について述べる。

## 8. スペインとイタリアにおける天正少年使節<sup>66</sup>

### 8.1. スペイン

使節団はエルヴァスからスペイン王国のバダホスの町に入り、その後いくつか町や村を経てトレドに至った。千々石ミゲルの急病によりこの町に20日間滞在したが、ミゲルの病状回復後マドリッドを目指した。

使節団がマドリッドに近づいたとき、貴族数人が馬車で迎えに来ていた<sup>67</sup>。使節たちは古くからの知人であるかのようにこの人々に歓迎され、1人ずつ馬車でマドリッドのイエズス会学院まで案内された。これは10月20日のことであった。ここでも多くの歓迎を受け、約36日間この地に滞在した。

マドリッドでは、この時期ヨーロッパ及び全世界における最大最強の人物であったといわれる国王フェリペ2世(Sande 2009)に謁見した。フェリペ2世は訪問者を抱擁し、歓迎した。この謁見の席上、使節の派遣者である大名たちからの書簡が日本語とスペイン語で朗読され、フェリペ2世は笑顔でそのメッセージに応えた。フェリペ2世はメスキータ神父によ



る通訳を介し、日本の着物を着ている少年達にその服装について尋ねた。フェリペ2世が自分達の履物、草履に興味を抱いているのに気づいた原マルチノは、国王が近くでそれを見られるように自身の草履を手にとって国王に示した。最後に少年達はフェリペ2世に贈り物を献上した。国王はその贈り物の装飾と優雅さを賞賛し、喜んで受け取った。フェリペ2世は使節団の旅が順調に進むようにスペインのローマ大使と使節団が訪れる町の知事に書簡を送った(サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862)。

マドリッドには約36日間滞在したが、その間の11月に近くのエスコリアルに立ち寄り、サン・ロレンソ修道院に宿泊した。ここでは少年達の優美な衣装と珍しい顔立ちが多くの人々の注目を集めた(Moura 1968-69; Figueiredo 1862)。

マドリッドでの最終日、1584年11月25日にフェリペ2世が使節の宿舎イエズス学院を訪れ、贈り物と旅費としての金銭を贈った。この日使節団は馬車でマドリッドを出発した。

マドリッドでフェリペ2世に大歓迎されたため、ヴァリニャーノが望んでいたこととは異なり<sup>68</sup>、使節たちはその後様々な町で同様に歓迎されることになった。

1585年1月5日、使節は地中海の港町アリカンテに至る。この町で14日間滞在し、船でイタリアへ向かった。同月の18日に出発する予定だったが、逆風のため2度港へ引き返さなければならなかった。2月7日になって、ようやく出発可能となった。数日後マヨルカ島のアルクーディアに到着し、3日間宿泊した。使節団の訪問の情報を受けた町長が彼らの船を訪れた。日曜日に使節団がミサのため町へ出かけた際、町長は400人の兵士と共に迎えに来て、町で少年達を盛大に歓迎した。

そして、3月1日、ついにイタリアのリヴォルノの港に到着し、イタリアに入った。

## 8.2. イタリア

使節団はリヴォルノで一泊し、翌日陸路でローマへ向かった。途中多くの町を通ったが、スペインのときと同様に行く先々で大歓迎された。

サン・クイリコという町を訪れたとき、教皇グレゴリオ13世からの伝言を受け取った。教皇は少年達との面会を切望しており、また、自身の余命が幾ばくも無かったため、使節団に先を急ぎ23日には到着するようにとのことであった。中浦ジュリアンが病気であったのだが、使節団は急遽ローマへ向かった。

1585年3月22日の午後、使節団は多くの迎えの人々と共にローマに入った。着物を着て腰に刀を差し、華やかに着飾った馬に乗り、街路をパレードした。日本からの訪問者を歓迎するため市内の教会の鐘が鳴らされ、サントジャンジェロ城から礼砲が撃たれた。ローマでは約70日間滞在した。

3月23日の朝、使節団は教皇グレゴリオ13世と枢機卿25人が集まっている教皇枢密会議室を訪問し、大歓迎された。しかし、中浦ジュリアンは高熱のため同行できなかった。会議室では伊東マンショが日本語でスピーチを行い、それをメスキータ神父がイタリア語とラテン語に同時通訳した。キリシタン大名からの書簡もイタリア語に訳されて披露された。

中浦ジュリアンの病状を知った教皇は急ぎ彼の所に医者差し向ける。謁見の後、少年達

は教皇に旅と日本のキリスト教の状況について報告した。

3月25日、前回と異なる着物を着て、受胎告知の祝いのため少年達は教皇に伴われてサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会を訪れた。その後、4月4日に教皇グレゴリオ13世と私的に面会し、その際に琵琶湖や安土城及びその城下町が描かれている屏風<sup>69</sup>を教皇に献上した。この屏風は、戦国大名織田信長の命令により描かれた屏風絵で、ヴァリニャーノに与えられたものである（サルゲイロ 2014; Figueiredo 1862）。

しかしながら、以前から病気であった教皇は病状が悪化し、4月10日に没した。この日使節は町を訪れた際に教皇の訃報を知り、宿舎に戻って喪に伏した。

4月21日、新教皇の選挙のため枢機卿が集まり、後継者選びのコンクラーヴェを行った。コンクラーヴェの5日目、4月25日にフェリーチェ・ペレッティ枢機卿が新教皇として選ばれ、シクストゥス5世と名乗った。こうして、ローマ滞在の間、使節たちは新教皇の戴冠式を目撃することができたのである。

4月27日使節は 新教皇シクストゥス5世に拝謁し、名代を務めていた3人のキリシタン大名の代わりに教皇への敬意を述べた。新教皇は喜んで彼らの言葉を受け、グレゴリオ13世と同様に日本での布教活動に貢献することを約束した。

5月1日、病状が快復していなかった中浦ジュリアンを除く3人の少年達はサン・ピエトロ大聖堂で行われた教皇シクストゥス5世の戴冠式に出席した。少年達への情愛と尊重の証として、教皇は彼らをサン・ピエトロの騎士に任命した。さらに、旅費としての金銭や日本の神学校への援助などの特権を授与し、3人のキリシタン大名への手紙や贈り物を託した<sup>70</sup>。ヨーロッパでの道中の便宜を図るため推薦状も与えた。

1585年6月3日、使節団はローマを出発し、長い帰国の旅に就いた。以前と異なるルートから帰国したため、途中ヴェネツィアやボローニャ、ミラーノ、ジェノヴァなど、イタリアの主な町に立ち寄った。どこへ行っても大変注目を浴び、熱狂的な歓迎を受けた。特にヴェネツィア共和国での歓迎と歓待はスペイン国王や教皇にも負けないくらい立派なものであった。町のサン・マルコの祝祭の日は使節団の訪問の日に合わせて3日間延期され、有名な画家ティントレットも許可を得て日本の少年達の肖像画を描いた<sup>71</sup>。

この時期イタリアにおいて最も人口が多かったミラーノでもウルバーノ・モンテという市民によって使節団のやや型にはまった感のスケッチが描かれ、現在まで伝わる肖像画となっている。

1585年8月3日使節団はミラーノを出発し、ジェノヴァへ向かった。8月8日ジェノヴァで船に乗り、翌日スペイン王国へ向けてイタリアを出発した。8月16日スペインのバルセロナに到着した。

### 8.3. スペイン - 帰路

バルセロナでは、再び発病していた中浦ジュリアンが必要な治療を受けられるよう25日間滞在した。バルセロナを出発した後、モンソンへ行き、ここでフェリペ2世に別れの挨拶をした。サラゴサとアルカラを経てマドリッドに至る。マドリッドで短期間滞在し、ポルトガルへ向う。

## 9. ポルトガルにおける天正少年使節 - 帰路

### 9.1. ヴィラ・ヴィソーザ

1586年2月8日使節団は再びブラガンサ公爵の町ヴィラ・ヴィソーザに至る。以前と同様に公爵のもてなしを受け、4日間滞在した。ヴィラ・ヴィソーザの後、以前も訪れた町エヴォラに向かった。

### 9.2. エヴォラ

エヴォラでは、使節団はイエズス会士と大司教テオトニオ・デ・ブラガンサに大歓迎され、9日間滞在した。大司教は毎日豪華な食事を提供し、また、使節団が持ち帰れるように自身の礼拝堂の絵画や聖遺物、その他の貴重な物のほとんどを贈り物として渡した。

使節団がこの町を訪問した折、彼らが以前インドで会ったインド総督フランシスコ・デ・マスカレニャスもそこにいた。マスカレニャスは使節団と会い、個人的にも、また、彼らの必要なものについても援助すると宣言した。

使節団の訪問はエスピリト・サント学院の学生たちに祈りや頌歌で祝われたので少年達は非常に喜んだ。

この町からリスボンに向けて出発し、アルカセル・ド・サルという町にあったイエズス会の家<sup>72</sup>に数日間滞在した。その後、アルベルト枢機卿からの迎えの舟でテージョ川を渡り、リスボンに戻った。

### 9.3. リスボン

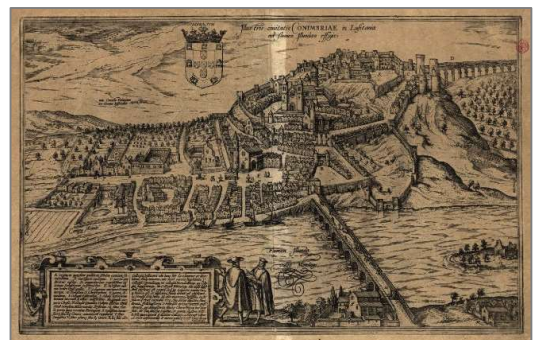
使節団はリスボンに到着後、枢機卿アルベルトを訪問し、再びイエズス会士に盛大に迎えられ、サオン・ロケ修道院に宿泊した。

アジアへの航行が翌年三月に延期され、時間があつたため、使節団はリスボンで何度も枢機卿アルベルトを訪問した。また、サント・アンタオン学院も訪れて学生たちに様々な歓迎を受けた。

ポルトガルに滞在中、コインブラの学院のイエズス会士の要請でコインブラも訪れた。コインブラの神父が少年達と面会することを望んでおり、また、一方、少年達も日本で多くを聞いていた有名なコインブラ学院を自分の目で見ることを望んでいたのである (Figueiredo 1862; Moura 1968-69; Sande 2009)。

### 9.4. コインブラ

少年達はコインブラに向け、舟でテージョ川を上り、リスボンからサンタレンに至った。サンタレンで数日間滞在した後、陸路でトマール<sup>73</sup>に至る。そこでキリスト騎士団の修道院と教会を訪れ、その芸術や多くの高価な作品に非常に感銘を受けた。その後コインブラに向かい、1585年12月23日に到着した。使節団の到着は、イエズス会の学院では



11 コインブラ、16世紀

天正使節を派遣したキリシタン大名たちを称賛する素晴らしいスピーチによって祝われた(Sande 2009)。

少年達はこの町では20日間滞在し、イエズス会の学院や有名なコインブラ大学<sup>74</sup>を訪問した。大学では授業に参加したが、彼らを迎えるために生徒たちは礼装していた。コインブラ司教アフォンソも彼らを大喜びで迎え、様々な贈り物を贈った上、この20日間にわたり、町内の様々な場所を案内して回った。



12 コインブラ大学

使節団は1585年のクリスマスもこの町で過ごした。司祭たちはキリスト降誕場面を上演した。コインブラ司教アフォンソは大聖堂で行われるミサに使節を招待し、主礼拝堂内で少年達に特別席を用意した。また、王子だけが受けられる名誉も与え、儀式を執り行った。

使節団はコインブラからリスボンへの帰途、バタリャとアルコバサを訪れて有名な修道院にも立ち寄り、大変感銘を受けたようである。



13 バタリャ修道院



14 アルコバサ修道院

## 9.5. リスボンからの出発<sup>75</sup>

使節団はアルコバサを出発し、リスボンに戻り、そこで帰国の旅の準備を始めた。枢機卿アルベルトからは、旅費としての4000クルザードと旅のための差し入れや衣服、食料などを与えられた。多くの荷物やヨーロッパ各地で贈られた品々などを荷造りし、準備しなければならなかった。その後、枢機卿とイエズス会士に別れを告げ、1586年4月12日、リスボンで大型船<sup>76</sup>に乗船し、日本へ向けて出帆した。

## 10. 日本への帰国と天正遣欧少年使節の影響

赤道を通過した1586年5月6日まで航行は順調に進んだ。その後いくつかの危険な状況に遭遇したが、1586年7月7日無事に南アフリカの喜望峰を通過した。その後、大嵐に遭ったにもかかわらず、1586年8月31日無事にモサンビークに入港した。しかし、この最初の経路を予定日数内に終了できなかったため、モサンビークに到着したときには、すでにインドへの出帆の時期は終わっていた。従って、翌年3月までモサンビークで待機しなければならなかった。

当時ゴアにいたヴァリニャーノ神父は、使節の船が大船団と共にインドに入港していないことを不思議に思った。彼らがまだモサンビークに留まっている可能性を考え、神父は使節団をゴアまで導くために、小型の速度の速い船をモサンビークまで向かわせた。また、その地の知事に書簡を送り、使節団がモサンビークに留まっていたら、彼らの旅に必要な差し入れをして早めにその船でインドへ向かわせるように依頼した。このようにして、1587年3月15日使節団はゴアに向け、モサンビークを出帆した。

使節は同年5月29日ゴアに到着した。そこでアレサンドロ・ヴァリニャーノ神父に再会し、11か月間滞在した。町ではインド総督と様々な人々の歓迎を受けた。

ヴァリニャーノと使節たちは日本へ行くイエズス会士と共に1588年4月22日にゴアを出帆し、70日後の1588年7月1日マラッカに到着した。マラッカで12日間滞在中後マカオに向けて出帆し、8月11日マカオへ入港した。

マカオまでの旅は予想以上に時間を費したので、航行に適した風向きの良い時季を待たなければならなかった。少なくとも10か月の滞在が必要だったのだが、その当時の日本における政治の混乱やイエズス会士の追放<sup>77</sup>により、日本への入国は禁止され、使節団はマカオで約2年間滞在しなければならなかった。その間、中国船がもたらした手紙から日本の深刻な事態が伝えられた。ヴァリニャーノ神父も様々な手段によって日本への渡航を試みたが、日本入国の許可を得るまで待たなければならなかった。

長期交渉の末、豊臣秀吉が使節団の帰国を許可したので、1590年6月23日使節達は日本に向かってマカオを出帆した。1590年7月21日、ヨーロッパへの出発から8年半後、使節団はついに長崎へ帰り着き、この長い旅を終了した。

4人の少年達が下船したとき、それぞれの家族は4人の見分けがつかなかったと言われている（サルゲイロ 2014）。8年半前にこの壮大な旅に出発した幼い10代の4人の少年達が外国を体験し、様々な影響を受けた青年に成長していたからである。

### 10.1. 日本における天正使節の影響

使節団の日本への帰国後、多くの大名とその側近たちが使節団が西洋諸国で見聞した経験を聞き、学ぶために集まってきた<sup>78</sup>。しかし、帰国後の最も重要な出来事は、1591年3月3日京都の聚楽第で行われた豊臣秀吉への謁見であった。街道には多くの人々が少年達を見ようと集まった。この謁見後、ヨーロッパからの贈呈品の献上を受けた秀吉は使節団にヨーロッパ諸国に関して尋ねた。また、伊東マンショに仕官を勧めたが、彼は丁重に辞退した。最後に、4人は持ち帰った楽器で西洋の音楽を披露した。秀吉はたいそう満足して再演奏を所望し、楽器を注意深く手に取って眺めた（サルゲイロ 2014）。

### 10.2. 帰国後の使節たちの人生

帰国の際に行われた公式の歓迎式終了後、4人は布教活動に専念するためイエズス会に入会した。伊東マンショと原マルチノ、中浦ジュリアンの3人は司祭に叙階された。4人は8年間のヨーロッパへの長い旅を共にしたにもかかわらず、日本での生活はそれぞれ異なるものとなった（サルゲイロ 2014）。

伊東マンショは小倉で働き、九州各地を訪れた後、1612年11月13日、43歳で長崎において没した(松田 2001)。千々石ミゲルはキリスト教の信仰を放棄し、1606年に大名大村喜前に仕えることになった(Ribeiro 2006)。彼の死亡日は不明である。1614年徳川幕府により宣教師が日本から追放されたとき、説教者となっていた原マルチノもマカオに追放された。彼は15年間イエズス会学院の教授として生き、日本から逃げて来たキリスト教徒を迎えて日本のキリスト教の歴史に貢献した。1629年10月23日彼はマカオにおいて没した(松田 2001)。中浦ジュリアンは徳川幕府の退去命令に背き、口之津で長年にわたって迫害されていた日本のキリスト教徒を勇気づけ、支援し続けた。しかしながら、その後は捕われ、禁止されていたキリスト教を信仰し続けていたという理由で1632年に死刑を宣告された(サルゲイロ 2014)。彼は他の宣教師と共に長崎で3日間の拷問に耐えたが、1633年10月21日殉教した(松田 2001)。

### 10.3. 17世紀初頭におけるキリスト教の状況

1587年から悪化しはじめた日本におけるキリスト教の状況は、使節団の帰国後しばらくは改善した。しかし、16世紀末から17世紀初頭にかけて日本が再統一へ向かって動きはじめたとき、日本に渡来した新たな修道会<sup>79</sup>との争いが起こり、キリスト教徒にとっても困難な日々が続いた。

また、1606年には日本はスペインのフェリペ2世の政敵で宗教上の対立もあったオランダとも交易を始めるようになった。オランダは日本との貿易の権利をポルトガルから奪い、日本とポルトガルの関係を寸断しようと画策した。このため、1635年將軍徳川家光はポルトガルとの接触を禁止した。これにより、日本におけるポルトガルとイエズス会の影響力は急速に弱まった。両国の交易再開を嘆願するために1640年に日本に派遣された使節団は虐殺され<sup>80</sup>、日葡関係はその時から2世紀以上の間途絶えることになった<sup>81</sup>。

東洋におけるイエズス会の布教活動と発展はポルトガルにとって有益であった。しかし、ポルトガルと日本の間の政治的・経済的関係の終焉に繋がったことも確かな事実であると思われる。

## 11. 日本人らしき人物が描かれた最初の宗教画 - 「ペンテコステ」<sup>82</sup>

ヨーロッパにおける天正少年使節の訪問は各地に様々な影響を与えた。ポルトガルも例外ではなかった。ポルトガルにおいては、使節団が訪れたことが芸術的な表現、すなわち、アジア人のような人物が描かれている16世紀末の宗教画の出現につながっていると考えられている。

以下、上記絵画の作者及びヴィラ・ヴィソーザにおいて使節団を迎えたブラガンサ家と作者との関係、また、フレイショ・デ・エスパダ・ア・シンタ<sup>83</sup>のサント・アントニオ礼拝堂に現存する、この不思議な宗教画について紹介する。

### 11.1. 画家アントニオ・レイタオンの紹介

アントニオ・レイタオンは16世紀のポルトガル人画家で1530年頃カステロ・ボン<sup>84</sup>の



貴族の家系に生まれた。思春期、ドミンゴス・レイタオンという叔父<sup>85</sup>の支援で首都リスボンへ行き、ドナ・マリア王女<sup>86</sup>の侍従となる(Serrão 2010)。

アントニオ・レイタオンはドナ・マリアにその才能を認められ、ローマで美術を学ぶための奨学金を与えられた(Pinto 1996; Veiga 2011)。ローマの後、レイタオンは叔父のドミンゴス・レイタオンと共にフランドルへ行き、そこでスペイン軍に加わった<sup>87</sup>。フランドルで知り合ったルジア・ドス・レイスというアントワープ出身の画家と結婚した後、二人はポルトガルに定住し、1564から1580年にかけてポルトガルのブラガンサとラメゴに住む。彼らは1595年以後にブラガンサで没したと言われている<sup>88</sup> (Serrão 2010)。子孫は息子2人とマリア・レイタオンという娘1人であった。娘はブラガンサ家の薬剤師でキリスト騎士団の騎士でもあったグレゴリオ・ロドリゲスと結婚した(Machado 1752; Pinto 1996)。

アントニオ・レイタオンは、また、1580年から1581年にかけてポルトガル王位の候補者であるクラトの修道院長ドン・アントニオ<sup>89</sup>を支持したため、家族と共にブラガンサで自主亡命した<sup>90</sup>。そのような状況にもかかわらず、レイタオンは慎重に画家としての活動을続け名声を得た。晩年彼は特にブラガンサ周辺の土地で宗教画を描いた<sup>91</sup>。

レイタオンの主人であったドナ・マリアの宮廷の周りには多くの学者と芸術家がいた。宗教闘争があったこの時期、彼らの間では精神の深化や新世界<sup>92</sup>の発見などのようなテーマについて、人文主義やネオプラトニズム主義の議論が行われた。このことから、レイタオンの絵のテーマや描き方などが理解できる(Serrão 2010)。

ドナ・マリアとその取り巻きの人々は東洋に憧れ、非常に興味を持っていた。そのため、アジアの様々な領土からの品々を集めただけでなく、社会やその習慣などを研究するという意味で新世界の知識を発展させ吸収した<sup>93</sup>。このような背景から、「ドナ・マリアの侍従」であり、「スペイン軍の兵士」、また、「ポルトガル王位の候補者ドン・アントニオの支持者」であり、「優秀な画家」でもあったこの男アントニオ・レイタオンの多面性を想像することができる。



15 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」

## 11.2. 宗教画「ペンテコステ」について

アントニオ・レイタオンによって描かれた絵と鑑定された絵画<sup>94</sup>は少数だが、彼が1580年頃に前述のフレイショ・デ・エスパダ・ア・シンタの礼拝堂にある「ペンテコステ」の場面を描いたことは史実である(Serrão 2010)。この「ペンテコステ」は、レイタオンがローマとアントワープでの修業で触発された芸術的才能を示しており、この絵画の人物の描き方から<sup>95</sup>、詳細な構図の創造力が推察される。

現在まで注目を浴びることのなかったこの絵画は、その構図に特徴がある。聖母マリアの左右に使徒ヨハネ<sup>96</sup>と使徒ペドロ<sup>97</sup>が描かれており、その周りには、ローマのパンテオン<sup>98</sup>に影響を受けたかのような構図で28人の人物が様々な平面内に配置されて描かれている(Serrão 2010)。この28人は、キリストの使徒や貴族の夫婦、フランシスコ会の修道士、商人、ベルベル人<sup>99</sup>、そして、日本のもののように思われる帽子(笠<sup>100</sup>)を被り、着物<sup>101</sup>を着ている2人の若いアジア人のような人物などの様々な当時の人物である。



16 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」の一部

これらの人々一人一人の上に天から分かれて降っている炎のような舌<sup>102</sup>、つまり聖霊の印の下に聖母マリアの像があり、その後ろに着物を着た日本人の若者のような人物を抱いているキリスト教徒の女性が描かれており、絵画の世界宗教的な特性が強調されている。

この絵画上の日本人と思われる人物の描写は、東洋におけるカトリック諸国の発

見をキリスト教の下に共有するという意志を示しているものと考えられる。また、描かれている人物たちについては、16世紀におけるポルトガルの社会を定義するために各階級の人々のステレオタイプを宗教的な画像を通して識別して表しており、芸術研究の歴史の中で非常に重要なものである(Serrão 2010)。

16世紀後半のこの素晴らしい絵画の大事な点の一つは、それがその当時のポルトガル社会の階層構造の変化の始まりを、少なくとも絵画の面で表現しているものだということである。つまり、当時変わり始めた社会の肖像画であるということである。社会が新世界の知識を持ち始めたこの時代は、社会の変化及び社会における人間の個々の重要性の再定式化の原点として考えなければならないのである。

基本的にアントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」は他の一般的な「ペンテコステ」に比べ、より人間主義的な意味を持つ以上のことを意味している。それはこの絵に他の画家による「ペンテコステ」に描かれている宮廷や貴族、軍人、騎士の代わりに、キリスト教の世界宗

教的な雰囲気を持つ商人やフランシスコ修道士、イエズス会の司祭、またポルトガルが訪れた国々の人々など、当時は身分の低い階層の人々として扱われていた人物<sup>103</sup>が描かれていることから考えられる (Serrão 2010)。

クラトの修道院長ドン・アントニオの支持者であり、また、ポルトガルにおけるスペインの支配に反対するレイタオンにとって、この身分の低い人々はポルトガル王国の真の代表者であったと考えられる (Serrão 2010)。

## －「ペンテコステ」と天正少年使節との接点

この「ペンテコステ」は、日本人と思われる人物を描写したヨーロッパの芸術における最も古い絵の一つであり、また実に最古の絵画である可能性もある。また、この絵は天正少年使節の1584年のポルトガル宮廷への訪問と同年代に描かれたものでもある。

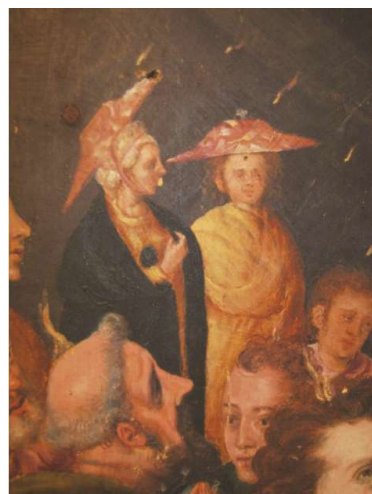
レイタオンの「ペンテコステ」に描かれている日本人らしき人物が伝統的な衣装である着物<sup>104</sup>のようなものを着ていることは、当時ヨーロッパの他の画家によって描かれた使節団が洋服を着ている絵<sup>105</sup>とは異なる。

もし、アントニオ・レイタオンがヨーロッパの他の画家と同様に、このアジア人と思われる人物を洋服姿で描写していたら、この絵画は世界宗教的な意味を失い、ヨーロッパにおける日本人らしき人物の最初の絵と見なすことはできないであろう。それまでキリスト教が伝導されていた様々な地域や国の人々を描写しなければならなかった画家は、その日本人らしき人物の出身地が目につくように、他の人物と区別して描かなければならなかったものと推測できる。

しかし、日本の着物のように見えても、その詳細が不足していることから、画家自身が日本人使節団を自分の目で見たのではなく、他の人間を通じてその訪問と衣装の情報を得たと考えられる<sup>106</sup>。

ポルトガルにおける少年使節団の訪問と「ペンテコステ」上の日本人らしき人物の描写との繋がりとは、おそらく画家とその義理の息子でブラガンサ家の薬剤師であったグレゴリオ・ロドリゲスとの関係によるものと考えられる可能性が高い。ロドリゲスがブラガンサ家の他の従者と同様に、ヴィラ・ヴィソーザで伝統衣装を着た日本人の姿を見て<sup>107</sup>、後にアントニオ・レイタオンにその情報を伝えたと考えるのは無理なことではないと思われる。

この予想外のアジア人の像は、聖霊の下に集まった様々な人々や文化の混入と緩い解釈を通して、この宗教画をキリスト教の世界宗教的側面の希少な証言としていると考えられる (Serrão 2010)。



17 アントニオ・レイタオンの「ペンテコステ」の一部

## 12. まとめ

上述のとおり、16世紀後半から17世紀にかけてイエズス会士の活動は日葡関係に深い

影響を与え、宗教面だけでなく教育や科学、また、交易及び政治面でも重要な役割を果たした。また、17世紀における日本とポルトガルとの関係は非常に残念な終わり方をしたにもかかわらず、約一世紀の間続いた日本人とポルトガル人の間の交流は、日本とヨーロッパの歴史上重要な意味を持っており、双方に大きな影響が残されることになったのである。

日葡関係の歴史上、最も重要な出来事の一つは天正遣欧少年使節の渡航であったと言える。ヨーロッパで一大センセーションを巻き起こした使節団の訪問は、日本にヨーロッパに関する新しい情報や日本における布教活動のための援助をもたらした一方、それ以前は日本人が訪れたことのないヨーロッパ各地で大きな影響を与え、ポルトガルでは最初の日本人らしき人物を描写した絵が残された。

最近まで注目を浴びることのなかったレイタオンの「ペンテコステ」については、今後研究されるべきことが多く残っていると思われる。この絵画は世界各地におけるカトリック教会の影響の証拠であると考えられる。しかし、もし天正遣欧少年使節のポルトガル訪問が実現されなかったら、この絵画はその世界宗教的な意味を失い、他の一般的な「ペンテコステ」と同等の価値しか持たない宗教画として扱われることになったであろう。

画家がこの「ペンテコステ」で様々な国の人々を描いたことにより、この絵画は独特で他に例を見ない世界宗教的な特徴を与えられた。もし、キリスト教がすでにアジアの遠く離れた地まで伝えられていたこの時代において、これらの日本人らしき人物の描写が含まれていなかったら、この絵画は全てのキリスト教徒を描写しているとは言えない。このような絵画は、天正使節のヨーロッパ訪問があったからこそ可能になったと考えられる。また、日本人と思われる人物の一人がキリスト教徒の女性に抱擁されていることで、西洋と東洋のカトリックの人々の間に生まれた友情が表現されており、それが見る者に伝わってくる。この友情は、使節団が訪れたヨーロッパ各地で大歓迎されたことに関係しており、またヴィラ・ヴィソーザにおいて日本人とテオドジョ2世との間に生まれた若者同士の交流も西洋と東洋を結んだと言える。

上述のとおり、この「ペンテコステ」はその時代のキリスト教の普遍的な像だけでなく、キリスト教を通じて結ばれた世界各国の人々の間に生まれた友情をも表していると言っても過言ではないであろう。



## 注

- 1 本稿では、「天正少年使節」は人間的な面に、また「天正使節」は使節という役割に注目している場合に使う。
- 2 イエズス会とは、1534年、フランシスコ・ザビエルやイグナチオ・デ・ロヨラによって創設され、キリスト教の布教を目的として日本を含む世界各地にローマカトリックの教を伝導した男子修道会のことである。
- 3 宣教師とは、ある思想を伝えたり、宗教を教え広めたりするために、外国へ派遣され活動する者のことである。英語で「missionary」と言う。
- 4 領民には特に布教活動を通じてキリスト教の影響を与え、大名にはキリスト教と共に貿易の影響も与えた。
- 5 フランシスコ・ザビエルの名前について、スペイン語で「Javier」（ハビエル）、ポルトガル語で「Xavier」（シャヴィエル）と言う。しかし、彼の本名は「フランシスコ・ザビエル」ではない。スペインのナバラ王国(現ナバラ州)の「Javier」という土地で生まれたため、彼は「Francisco de Javier」（フランシスコ・デ・ハビエル、ハビエルのフランシスコの意味）と名乗りはじめた。
- 6 例えば、多くのキリシタン大名のキリスト教への改宗の動機など。
- 7 交易は「ポルトガルを日本と結びつける第一の媒体であり、非常に重要な役割を担っていた」(コスタ 1993 p. 8)。
- 8 イエズス会宣教師は「南蛮人と日本人とが日常的に共存するためのかけ橋の役割を果たした」(コスタ 1993 p. 8)。
- 9 外国語で記された最初の日本語辞書として記録に残っているのは、イエズス会のジョアン・ロドリゲスによるもので、この二つの文化の交流の第一歩でもあった(Jaca 2005)。
- 10 「日本初のキリシタン大名大村純忠がいい例です。… 洗礼を受けた後に領地内の仏教寺院を排除するように指示しました」(サルゲイロ 2014 p. 47)。
- 11 布教保護権。30 ページの注 31 参照。
- 12 天正遣欧少年使節をローマへ派遣した3人のキリシタン大名。
- 13 アレサンドロを「アレッサンドロ」或いは「アレシヤンドウロ」また、ヴァリニャーノを「バリニャーノ」と「ヴァリニャーニ」と記しているものもある。アレサンドロ・ヴァリニャーノに関しては、9 ページ参照。
- 14 有馬の大名有馬晴純(1483~1566)の次男で母が大村純伊の娘。これら二つの家の間での同盟があったため、大村純前(?~1551)の養嗣子となった(Ribeiro 2006)。
- 15 大村に位置していた横瀬浦は外国貿易のためには地理的に優れた港であった。また、希少な天然資源を持った所でもあった。現在の長崎県西海市。
- 16 1562年、大村純忠の招きでポルトガル船が横瀬浦に入港し、イルマン・ルイス・デ・アルメイダが教会を建て、純忠と契約を結んだ。
- 17 Ribeiro (2006) によると、大村純忠は、弟で有馬領主の有馬義貞と島原の領主との経済競争に動機づけられて洗礼を受けることに決定した可能性が高い。
- 18 大村純忠は横瀬浦の港の教会で受洗した。
- 19 大村純前の子で大村純忠の兄弟であったが、1545年、肥前の後藤氏の養子となった。
- 20 1563年11月、ポルトガル船がマカオに帰るとき、後藤貴明の軍の攻撃により、横瀬浦の港は完全に破壊され、そこにいたイエズス会士は散り散りに逃れた。
- 21 現在の大分市。ポルトガルルのアヴェイロの姉妹都市でもある(1978年10月10日に提携した)。
- 22 有馬晴信の父親。
- 23 島原の領主は洗礼を受けていないが、娘一人のための洗礼を求めた(Ribeiro 2006)。
- 24 千々石直員は有馬晴純の子で、千々石氏の養子。大村純忠は千々石直員の兄で、有馬晴信は甥に当たる。洗礼名は「ジョアオン」であった。千々石直員は天正少年使節の千々石ミゲルの父でもあった。
- 25 Ribeiro (2006) によると、1580年にアレサンドロ・ヴァリニャーノが記した手紙から、彼がすでにこのような状況になる可能性を考えていたことがわかる。大名の命令によって洗礼を受けた人々も多かったが、その大名がキリスト教を放棄すると人々もその後続いた。
- 26 イエズス会士は追放され、教会などは以前の所有者に戻された。
- 27 しかしながら、イエズス会の布教活動はこの地域における政治的及び軍事的な状況や混乱に影響を受けている(Ribeiro 2006)。
- 28 この同盟は実行されなかった。

- 29 ミゼリコルディアとも呼ばれる。ミゼリコルディアとは「慈悲」という意味で、ここにはキリスト教の精神に基づく病院や孤児・老人施設があった。ポルトガル語では “Santa casa da Misericórdia” (サンタ・カザ・ダ・ミゼリコルディア)。
- 30 特に、ヨーロッパへ知らされていた情報や新しい知識については、現実の豊富な経験に基づく情報が送られることとなった(サルゲイロ 2014)。
- 31 パドロアードともいわれる(ポルトガル語で Padroado、英語で Patronage)。ポルトガルの東洋におけるカトリックの布教保護権とは、大航海時代の15世紀後半、ローマ教皇とポルトガル王国の間に確立された協定のことである。布教保護権によって、ローマ教皇は、ポルトガル人が発見した地での全ての宗教活動の組織や資金をポルトガル国王に委任したのである。布教保護権は20世紀に入り、海外の領土がなくなると共に消滅した。
- 32 「日本人の倫理原則と習慣を受け入れようとする彼の姿勢は、異質なものにたいして並外れた理解力を示しています」(サルゲイロ 2014 p.54)。
- 33 有馬のセミナリヨ。
- 34 サルゲイロ(2014)の『戦国の少年外交団秘話』に記されている名前である。4人の洗礼名及び名前の正しい発音に関しては、不明な点がある。ラテン語、ポルトガル語、イタリア語とスペイン語で、この4つの名前があり、研究者によって、使われている名前が異なることもある。キリスト教の洗礼の際に付けられた名前なので、正しい発音はラテン語であったと考えられるが、少年達の名前の漢字も残っているので、その漢字の発音に近い名前を使うこともある。本稿では、『戦国の少年外交団秘話』に使われている名前を使う。洗礼名の発音に関しては、付録1参照。
- 35 サルゲイロ(2014)、志岐(2010)、松田(2001)が使っている名前である。
- 「千々石直員」(ちじわ なおかず)と記されている場合があるが、志岐(2010)、松田(2001)によると、直員は千々石ミゲルの父親であったと考えられる。
- 36 「原中務」(はら ナカズカサ / なかつかさ)と記されている場合があるが、原中務という人物は、おそらく、原マルチノの父親であったと思われる(松田 2001)。
- 37 現在の長崎県東彼杵郡波佐見町。
- 38 「後にエヴォラ司教区で司祭に任命されることになる(とフロイスが記述している)」(サルゲイロ 2014 p.60)。
- 39 カテキスタとは要理教師(カテキズムを教える人)という意味で、教会では洗礼志願者に対しキリスト教教理の指導と信仰生活の心構えを教える教師たちのことである。現代でも、子供の宗教教育にたずさわるほか、特に宣教地において宣教師の司祭を助け、キリスト教教理を教える職務がある。
- 40 旅のルートは、付録2参照。
- 41 船はポルトガル船で乗組員や乗客もほとんどポルトガル人だったので、船旅の間の会話もポルトガル語の学習を促進したと考えられる。
- 42 この時期、セイロン島はポルトガルの領土であった。
- 43 聖フランシスコ・ザビエルの最初の使命である布教活動の場所。
- 44 ポルトガル語では「ボア・エスペランサ峰」(Cabo da Boa Esperança)と言う。
- 45 旅のルートは、付録3参照。
- 46 大村市の姉妹都市(1997年8月21日に提携した)。
- 47 8月10日から11日の夜と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
- 48 サオン・ロケ教会は、16世紀末に建てられ、ポルトガルにおいてイエズス会の第二の教会でもあった。最初のイエズス会の教会は、使節団が訪れた、エヴォラのエスピリト・サント教会であった。
- 49 ポルトガルの総督でスペイン王国のフェリペ2世の甥でもあった。
- 50 8月12日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
- 51 この時代の主要な町三つの中で、リスボンに次ぐ町(Moura 1968-69)。
- 52 9月8日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。
- 53 Sande (2009)によると、これはただのイエズス会の学院ではなかった。ここは、当時のポルトガルの二つの公立大学の一つで、イエズス会士が様々な土地から来る生徒たちに芸術や文化、哲学、ラテン語を教えていた大学でもあった。



54 十字架挙栄祭とは、正教会と東方諸教会において祝われる祭の一つである。イエス・キリストが掛けられた聖十字架が発見されたことと、十字架にまつわる諸事を記念する祭であり、9月27日に祝われる（修正ユリウス暦使用教会では9月14日に祝われる）。ポルトガル語では「Exaltação da Santa Cruz」と言う。

55 カトリック教会の聖体に対する信心業の一つ。通常、ミサ後、屋外で行われる。十字架を先頭に侍者、白衣の少年少女が続き、次に移動天蓋の中央に司祭が聖体顕示台を捧持し、その後に修道士、信徒らが従う。

56 パソ礼拝堂(Capela do Paço)。

57 「(…)金糸の施されたアラス織りのタペストリー4枚 … このタペストリーは一行の帰国に先んじて1585年に日本へ送られましたが、その船は同年8月19日に東アフリカのモサンビークの南沖合で難破したため失われてしまったといひます」(サルゲイロ 2014 p.65)。

58 クルザードはその当時の通貨。

59 1601年にアルカラで出版されたルイス・デ・グスマンの『東方伝道史(História de Las Misiones)』によれば、使節団は高名なフェルナン・ヴァス・ドラードの地図を閲覧する機会に恵まれたことが記述されている(サルゲイロ 2014)。

60 スペイン・ポルトガル同君連合(1580年～1640年)。1578年、ポルトガル国王セバスティアオンの死後、ポルトガル王家の親戚でもあったスペインの国王フェリペ2世は1580年にポルトガル王位を継承し、その後60年間スペインはポルトガルを支配する。

61 ヴィラ・ヴィソザ訪問の際に、使節たちは14歳から16歳ぐらいであった。

62 1578年8月、モロッコのアルカセル・キビールという町の付近で開催された戦いのことである。テオドジョ2世は、その時のポルトガル国王セバスティアオンと共に戦いに出征したが、捕虜として囚われ、2年後スペインのフェリペ2世によって解放された。

63 ドナ・カタリーナはポルトガルの国王マヌエル1世の孫娘であったため、フェリペ2世がポルトガルの王になる前は、彼女も他の人物と同様にポルトガル王位への候補者の一人であった。

64 Sande(2009)によると、この邸宅は公爵宮殿というよりも、王宮と言ってもよいようであった。

65 狩猟地には、イノシシ、ウサギ、シカなどが多数おり、釣りもできる小川が2本流れており、湖、泉や庭園などもあった。また、二つのエルミタージュ\*とカントリーハウス\*もあった(サルゲイロ 2014)。

\*エルミタージュとは、教会の役割を果たす小さな建物のこと。

\*カントリーハウスとは、アレンテージョ地方でよく見られる石造りの小さな家のことであると思われる。

66 旅のルートは、付録3参照。

67「ヴァリニャーノの意向とは逆に、日本の使節団は国賓として華やかな歓迎でさまざまな場所に招かれました」(サルゲイロ 2014 p.71)。

68 ヴァリニャーノの考えでは、少年達は日本の貴族というより有馬神学校の生徒として迎えらるべきであった。

69 教皇の死後、この屏風を探したにもかかわらず、その所在はいまだに不明である。狩野永徳が描いた屏風絵である可能性が高い(サルゲイロ 2014)。

70 使節団が日本に帰国したとき、大村と大友の大名は既に死亡していたため、有馬の大名のみ教皇の手紙と贈り物を受け取った。

71 使節団の洋服姿が描かれており、画家はこの絵を完成させたが、長い間行方不明となっていた。長崎歴史文化博物館によると、2013年伊東マンショの肖像画は発見された。しかし他の3人の肖像画はいまだに行方不明となっている。

72 ヴァル・ド・ロザル(Vale do Rosal)と言う名前の家。

73 天正使節の訪問の時、この町の名前は「ナバンシア」(Nabância)であった。Sande(2009)では、Nabânciaと言う名前が使われている。

74 この大学はポルトガル最古の大学で、ヨーロッパの最も古い大学の一つでもある。ユネスコの世界遺産でもある。

75 旅のルートは、付録3参照。

76 この船は、インドやブラジル、アフリカなどに向けて次々とリスボンを出帆した28隻の大船団の1つであった。

- 77 1578 年、豊臣秀吉がイエズス会士の国外追放を命令したため、アレサンドロ・ヴァリニャーノの日本入国は禁止された。
- 78 「使節団はポルトガル、スペイン、イタリア 3 か国で 60 におよぶ都市を訪れ、数々の地図や絵画を持ち帰りましたが、それらは後に日本の画家たちによって東洋風に模写されることになります。さらに文字を自由に組み替えることのできる活版印刷機をヴァリニャーノの命によって持ち帰っており、それがこのミッションの大きな成果のひとつに数えられています」(サルゲイロ 2014 p. 81)。
- 79 「1592 年までは日本に存在しているのは、ポルトガル王室の布教保護下にあるイエズス会のみでした。しかし、フランシスコ会、ドミニコ会、聖アウグスチノ修道会の来日により緊張状態がつづいた結果、日本人からの不信感は決定的なものとなりました」(サルゲイロ 2014 p. 48)。
- 80 マカオからポルトガルの使節が派遣され、1640 年に長崎に到着したが、そのメンバーはほとんどが出島に監禁され、処刑された(松竹、1989)。使節のうち、13 人がマカオに返され、残りの 61 人は全員が斬首されたという。
- 81 「…両国の交流が復活したのは 1860 年のこの年のことでした」(サルゲイロ 2014 p. 49)。
- 82 「ペンテコステ」、ラテン語で Pentecostes(ペンテコステス)、とは聖霊降臨と呼ばれる新約聖書にあるエピソードの 1 つであり、イエスの復活及び昇天後、集まって祈っていた信徒たちの上に、神からの聖霊が降ったという出来事のこと。本稿で示している「ペンテコステ」とはその場面が描かれている宗教画のことである。
- 83 ポルトガル北東のスペインとの国境に近い所に位置している。
- 84 ポルトガル北東のグアルダの地区に位置している歴史的な町。
- 85 ドミンゴス・レイタオンは父方の叔父でポルトガル外交における著名人であった。1571 年からキリスト騎士団の騎士で、海外においてドナ・マリア王女の外交使節でもあった。
- 86 ポルトガルの王女ドナ・マリア(1521~1577)はヴィゼウの公爵夫人であり、ヴィラ・ヴィソーザで天正少年使節を迎えたブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナの叔母でもあった。ドナ・マリアの生涯は文学や芸術の後援や慈善活動、修道院や教会の建設などが中心となっていた。
- 87 アントニオ・レイタオンは、叔父のドミンゴス・レイタオンと共にフランドルへ行き、ドナ・マリアの財政支援を受けると同時に、兵士としてスペイン軍に入隊していた。スペイン・ポルトガル同君連合のため、ポルトガルはスペインの三十年戦争(1618 年~1648 年)やカタルニアの反乱(1640 年~1652 年)に巻き込まれ、スペインの敵であったオランダ・イギリスに通商路を絶えず脅かされていた。
- 88 二人はブラガンサのサオン・ジョアオン・バティスタ(S. João Baptista)教会で埋葬された。
- 89 ドン・アントニオは、ブラガンサ公爵夫人ドナ・カタリーナと同様に、国王マヌエル 1 世の孫であったため、彼もポルトガル王位への候補者の一人であった。しかし、他の候補者との争いに負けたのである。
- 90 この時期、レイタオンの講演者はドナ・マリア王女であったが、彼女の死後、レイタオンはブラガンサ公爵によって庇護される。
- 91 スペインの支配に反対していても、生活のため、おそらくスペインの近隣でも働くようになったと考えられる。
- 92 大航海時代、東洋を含むポルトガル人によって発見された土地のことである。
- 93 ドナ・マリアが手に日本の扇子をもった姿が描かれている絵画もある。
- 94 他の作品は、ラメゴにあるサンタ・アナ・デ・セボンイス(Santa Ana de Cepões)の礼拝堂やヴィラ・ノヴァ・デ・フォス・コアの教区教会に所蔵されている。
- 95 ポルトガルで描かれたペンテコステの中で、このように多くの人物や複雑なポーズが描かれている絵画は他にないと言われている。
- 96 英語で「St. John the Evangelist」或いは「John the Evangelist」。ヨハネによる福音書の記者であるヨハネを指し、キリスト教では伝統的に使徒ヨハネと同一視される。
- 97 英語で「St. Peter」。ペドロはイエス・キリストに従った使徒の一人。
- 98 ローマ市内のマルス広場に建造された神殿。元々は、様々なローマ神を祭る万神殿であった。
- 99 ベルベル人とは、北アフリカの地域に古くから住む、ベルベル族の人々のことである。ベルベル族はイスラム教徒であるが、ローマ帝国によりキリスト教へ改宗させられた者もいる。
- 100 笠というのは、戦国時代の武士の笠のことである。少年使節の 4 人が武家の出であるということは、旅の時に「陣笠(じんがさ)」を被っていた可能性が非常に大きいと思われる。

- 101 襟元が日本の着物のように見えるからである。
- 102 英語で「tongues of fire」。聖霊の印。
- 103 確実ではないが、これら人物の中に画家とその妻が描かれているとも言われている。絵の右後方に描かれている中年夫婦がアントニオ・レイタオンとルジア・ドス・レイスの肖像であると考えられる (Serrão 2010)。
- 104 天正使節の4人の少年達はヴィラ・ヴィソザの公爵や他の重要な人物への訪問の時に日本の伝統的な衣装である着物を着た。
- 105 イタリアのヴェネツィアで画家ティントレットによって描かれた少年達の肖像画とミラーノでウルバーノ・モンテによって描かれた使節団のスケッチでは、少年達の洋服姿が描写されている。
- 106 使節団がヴィラ・ヴィソザを訪れたとき、アントニオ・レイタオンがブラガンサで亡命したため、その町を出るのは彼自身にとっても彼の後援者であったブラガンサ公とスペイン国王の間でも問題になる可能性はあった。
- 107 14 ページ参照 (7.4.1. 天正少年使節のヴィラ・ヴィソザ訪問)。

## ＜参考文献＞

- 泉井 久之助 (1969) 『デ・サンデ - 天正遣欧使節記』 新異国叢書 5 雄松堂出版。
- 志岐隆重 (2010) 『ドキュメント・天正少年使節』 長崎文献社。
- コスタ、ジョアン・パウロ・オリヴェイラ・イ (1993) 『ポルトガルと日本 - 南蛮の世紀』 ポルトガル国立造幣局。
- 瀬野精一郎 『長崎県の歴史』 山川出版社。
- 高瀬弘一郎 (1993) 「イエズス会日本管区」 『日本通史 - 第11巻、近代1』 岩波書店。
- サルゲイロ、ティアゴ (2014) 『戦国の少年外交団秘話』 長崎文献社。
- 松田毅一 (2001) 『天正遣欧使節』 新装版、朝文社。
- 松竹秀雄 (1989) 「寛永17年(1640)ポルトガル使節団長崎受難事件(2)」 長崎大学経済学会 [編]。
- 結城了悟 (1990) 『新史料 - 天正少年使節』 南窓社。
- 若桑 みどり (2003) 『クアトロ・ラガッツィ - 天正少年使節と世界帝国』 集英社。
- ANTT Livro 4º de D. João I. *Fólio* 35.
- Carvalho, Daniela de (2000) Nambanjin: Sobre os Portugueses no Japão. Universidade Fernando Pessoa, *ANTROPOLógicas*, No.4.
- Figueiredo, António José (1862) A Primeira Embaixada do Japão à Europa. *Archivo Pittoresco*. No. 32, 33, 35, 36, 38, 39, 40, 42, 43, 44, 47, 50, 51, 52.
- Jaca, Carlos (2005) Relações Luso-Nipónicas nos sécs. XVI e XVII - (1). *DIÁRIO DO MINHO*.
- Jaca, Carlos (2005) Relações Luso-Nipónicas nos sécs. XVI e XVII - (2). *DIÁRIO DO MINHO*.
- Machado, Diogo Barbosa (1752) *Bibliotheca Lusitana histórica, critica e cronológica*, Tomo 3, Lisboa.
- Moura, Arq.º Carlos Francisco (1968-69) Notícias da visita feita a algumas terras do Alentejo pela primeira Embaixada Japonesa à Europa (1584-1585). *A Cidade de Évora - Boletim da Comissão Municipal de Turismo*, No. 51-52.
- Pinto, Carla Alferes (1996) O Mecenato da Infanta D. Maria de Portugal (1521-1577). Universidade Nova de Lisboa, Lisboa.
- Ribeiro, Madalena Teotónio Pereira Bourbon (2006) A Nobreza Cristã de Kyushu. Redes de Parentesco e Acção Jesuítica, Lisboa.
- Salgueiro, Tiago (2012) *Do Japão para o Alentejo - A Embaixada Tensho em Vila-Viçosa*. Chiado Editora.
- Sande, Duarte de (2009) *Diálogo sobre a missão dos embaixadores japoneses à Cúria Romana: Tomo I (Colóquios I-XVIII)*. Imprensa da Universidade de Coimbra, Centro Científico e Cultural de Macau.
- Sande, Duarte de (2009) *Diálogo sobre a missão dos embaixadores japoneses à Cúria Romana: Tomo II (Colóquios XIX-XXXIV)*. Imprensa da Universidade de Coimbra, Centro Científico e Cultural de Macau.
- Serrão, Vítor (2010) ECUMENISM IN IMAGES AND TRANS-CONTEXTUALITY IN PORTUGUESE 16TH CENTURY. ART: Asian Representations in Pentecostes by the Painter António Leitão in Freixo De Espada À Cinta, *Bulletin of*

*Portuguese-Japanese Studies*, vol.20, p.125-165. Universidade Nova de Lisboa, Lisboa.

Serrão, Vitor (2011) UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O ‘Pentecostes’ de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta. *Cadernos Terras Quentes*. Câmara Municipal de Macedo de Cavaleiros.

Veiga, Carlos Margaça (2011) *D. Maria - Uma mulher de cultura*. Academia Portuguesa da História.

## 〈ウェブサイト〉

<http://algunsdiasdosmouras.blogspot.pt/2010/01/origem-dos-de-moura.html>

<http://bushoojapan.com/wp-content/uploads/2014/03/201403171itoumassyo.jpg>

<http://historia-portugal.blogspot.jp/search?q=As+primeiras+relações+com+a+China+>

<http://menosemais.com/portfolio/centro-interpretativo-do-mosteiro-da-batalha/>

<http://worldheritage.uc.pt/pt/>

[http://www.cham.fcsh.unl.pt/ext/pages/glossario\\_visconde\\_lagoa.htm#Q](http://www.cham.fcsh.unl.pt/ext/pages/glossario_visconde_lagoa.htm#Q)

<http://www.fcsh.unl.pt/cham/eve/content.php?printconceito=1219>

<http://www.nagasaki-tabinet.com/guide/966/>

<http://www.panoramio.com/photo/71537847>

<http://www.patrimoniocultural.pt/pt/patrimonio/patrimonio-mundial/portugal/universidade-de-coimbra-alta-e-sofia/>

[http://www.pauline.or.jp/kirishitanland/20100601\\_misericordia.php](http://www.pauline.or.jp/kirishitanland/20100601_misericordia.php)

<http://www.pauline.or.jp/kirishitanstory/kirishitanstory06.php>

[http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa\\_evora.html#fotografias](http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa_evora.html#fotografias)

<http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php/view/35>

[https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo\\_de\\_Coimbra#/media/File:Illustris\\_civitatis\\_Comimbriae\\_in\\_Lusitania\\_1600\\_Georg\\_Braun.jpg](https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo_de_Coimbra#/media/File:Illustris_civitatis_Comimbriae_in_Lusitania_1600_Georg_Braun.jpg)

<https://www.unescoportugal.mne.pt/pt/temas/proteger-o-nosso-patrimonio-e-promover-a-criatividade/patrimonio-mundial-em-portugal/mosteiro-de-alcobaca>

<http://www.vision-grafica.net/monumentos-de-évora.html>

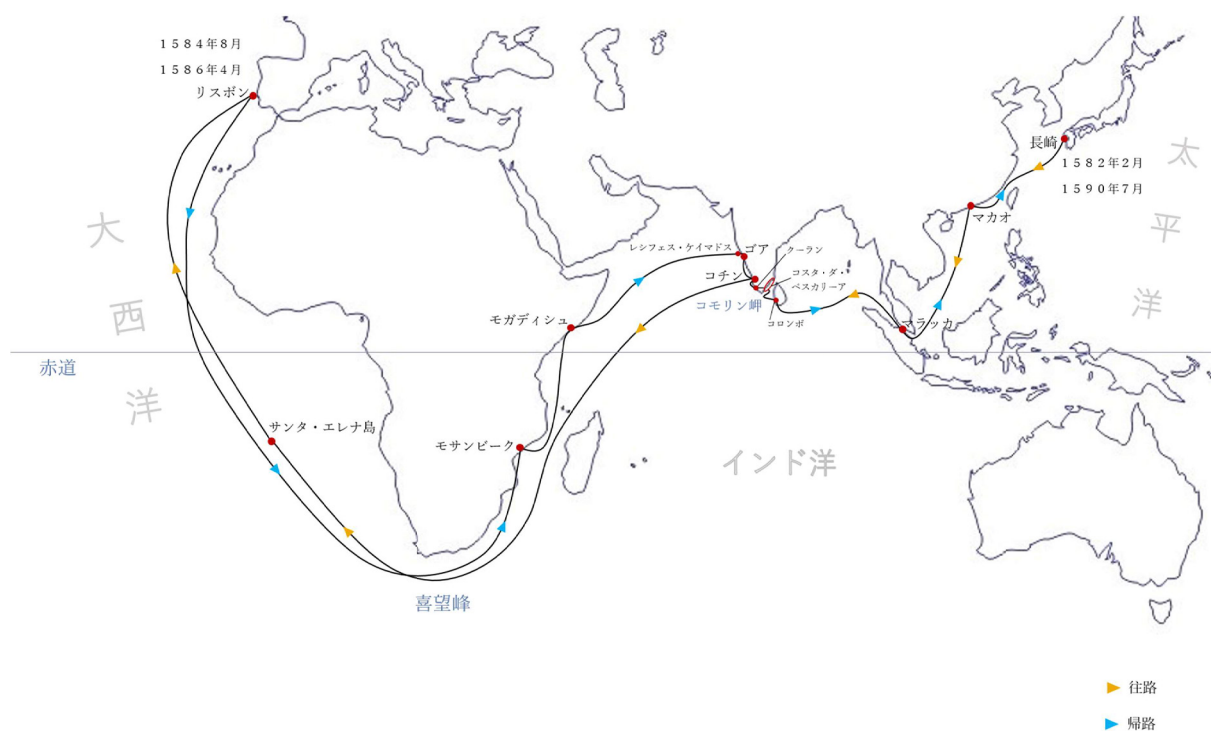
## 〈挿入画〉

1. 作者不明 「アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノの肖像」, 松田毅一 (2001) 『天正遣欧使節』新装版 p. 47 朝文社
2. 作者不明 『天正遣欧少年使節顕彰之像』 <http://www.nagasaki-tabinet.com/guide/966/>
3. 作者不明 Caravela Redonda ou da Armada Seculo XVI. <http://algunsdiasdosmouras.blogspot.pt/2010/01/origem-dos-de-moura.html>
4. SCML (2012) Santa Casa da Misericórdia de Lisboa - complexo de São Roque. <http://www.panoramio.com/photo/71537847>
5. 作者不明 (16世紀) 無題, *Foral de Évora* 1501
6. Concierge.2C (2013) Colégio do Espírito Santo. <http://www.historiadeportugal.info/edificio-do-colegio-do-espirito-santo/>
7. 作者不明 Sé de Évora. <http://www.vision-grafica.net/monumentos-de-évora.html>
8. António Rei (2015) Órgão da Sé.
9. Mário “Paço Ducal, Vila Viçosa”. [http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa\\_evora.html#fotografias](http://www.portugalmapas.com/vila-vicosa_evora.html#fotografias)
10. António Rei (2014) “Palácio Ducal de Vila-Viçosa”
11. Frans Hogenberg ‘Ilustris civitatis Conimbriae in Lusitania’ in Georg Braum (1598), *Civitates orbis terrarum*, vol. 5 [https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo\\_de\\_Coimbra#/media/File:Illustris\\_civitatis\\_Comimbriae\\_in\\_Lusitania\\_1600\\_Georg\\_Braun.jpg](https://pt.wikipedia.org/wiki/Castelo_de_Coimbra#/media/File:Illustris_civitatis_Comimbriae_in_Lusitania_1600_Georg_Braun.jpg)

12. 作者不明 (2013) Universidade de Coimbra Alta e Sofia <http://www.patrimoniocultural.pt/pt/patrimonio/patrimonio-mundial/portugal/universidade-de-coimbra-alta-e-sofia/>
13. Luís Ferreira Alves, Mosteiro da Batalha. <http://menosemais.com/portfolio/centro-interpretativo-do-mosteiro-da-batalha/>
14. Direção Geral do Património Cultural, Mosteiro de Alcobaça. <https://www.unescoportugal.mne.pt/pt/temas/proteger-o-nosso-patrimonio-e-promover-a-criatividade/patrimonio-mundial-em-portugal/mosteiro-de-alcobaca>
15. António Leitão (1580 年ごろ) Pentecostes, UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O ‘Pentecostes’ de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta *Cadernos Terras Quentes*, p.63
16. António Leitão (1580 年ごろ) Pentecostes (detail), UMA VISÃO ECUMÉNICA DO ORIENTE NA PINTURA PORTUGUESA DO SÉC. XVI – O ‘Pentecostes’ de António Leitão em Freixo de Espada-à-Cinta *Cadernos Terras Quentes*, p.65
17. António Leitão (1580 年ごろ) Pentecostes (detail), ECUMENISM IN IMAGES AND TRANS-CONTEXTUALITY IN PORTUGUESE 16TH CENTURY ART: Asian Representations in Pentecostes by the Painter António Leitão in Freixo De Espada À Cinta, *Bulletin of Portuguese-Japanese Studies*, p.153

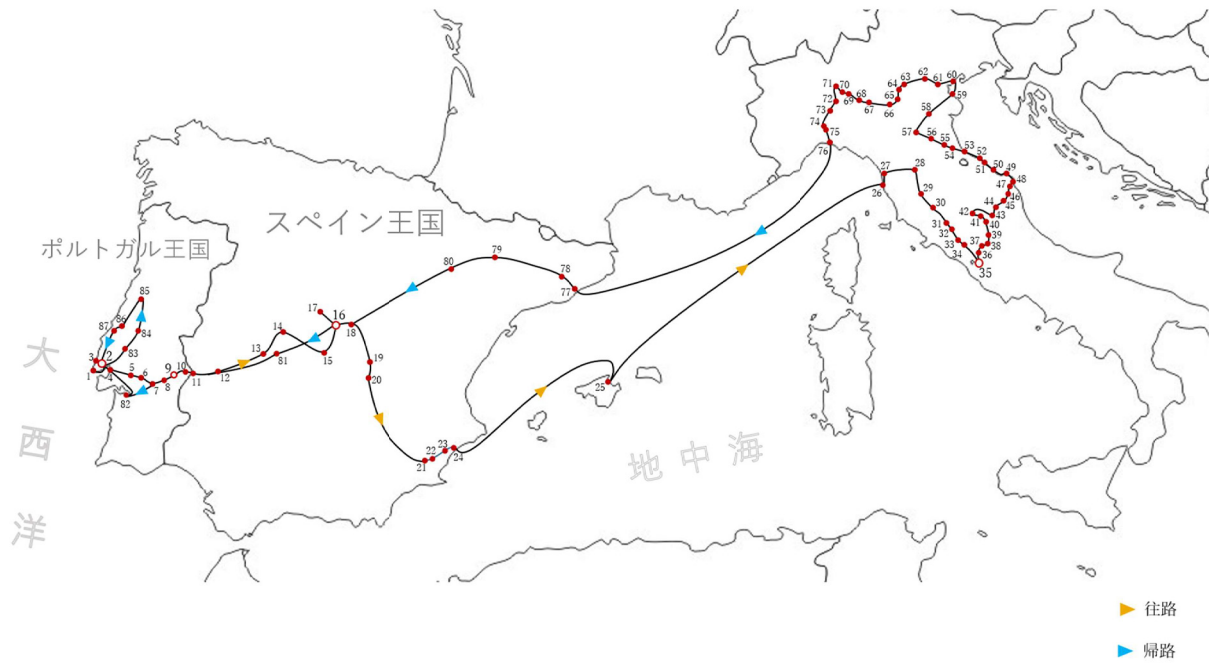
付録1. 使節たちの洗礼名の発音					
	ラテン語	ポルトガル語	イタリア語	スペイン語	漢字
伊東マンショ	Mancius (マンシウス)	Mâncio (マンシウ) 一般的な形式: Manços (マンスシュ)	Mancio (マンチョ)	Mâncio (マーンシオ)	満所 (まんしょ)
千々石ミゲル	Michael (ミカエル)	Miguel (ミゲル)	Michelle (ミケレ)	Miguel (ミゲル)	弥解留 (みかいゐる、 みげる)
原マルチノ	Martinus (マルティヌス)	Martinho (マルティーニョ) 一般的な形式: Martin (マルティン)	Martino (マルティノ)	Martin (マルティーン)	丸知野 (まるちの)
中浦ジュリアン	Julianus (ジュリアヌス)	Julião (ジュリアオン)	Giuliano (ジウリアノ)	Julían (フリアン)	寿理安 (じゅりあん)

付録2. 天正遣欧少年使節の旅 - 長崎・リスボン - リスボン・長崎





付録3. 1-天正遣欧少年使節の旅 -ヨーロッパ巡路



## 2 - 地図上の地名

### ポルトガル:

1. カスカイス
2. リスボン
3. シントラ
4. アルディア・ガレガ
5. ヴェンダス・ノヴァス
6. モンテモール
7. エヴォラ
8. レドンド
9. ヴィラ・ヴィソーザ
10. エルヴァス
82. アルカセル・ド・サル
83. サンタレン
85. トマール
85. コインブラ
86. バタリャ
87. アルコバサ

### スペイン:

11. バダホス
12. メリダ
13. グアダルペ
14. タラベラ
15. トレド
16. マドリード
17. エスコリアル
18. アルカラ
19. ヴィラレージョ
20. ベルモンテ
21. ムルシア
22. オリウエラ
23. エルチェ
24. アリカンテ
25. アルクーディア

77. バルセロナ
78. モンセラート
79. モンソン
80. サラゴサ
81. オロペサ

### イタリア:

26. リヴォルノ
27. ピサ
28. フィレンツェ
29. シエナ
30. サン・クイリコ
31. アクアペンデンテ
32. ボルセナ
33. ヴィテルボ
34. カプラローラ
35. ローマ
36. チヴィタ・カステラナ
37. ナルニ
38. テルニ
39. スポレト
40. フォリニョ
41. アッシージ
42. ペルージャ
43. コルフォリート
44. カメリーノ
45. トレンチノ
46. マチエラタ
47. レカナティ
48. ロレート
49. アンコナ
50. セニガッリア
51. ファーノ
52. ペザロ

53. リミニ
54. チェゼナ
55. フォルリ
56. イモラ
57. ボローニャ
58. フェッラーラ
59. キオッジャ
60. ヴェネツィア
61. パードヴァ
62. ヴィチェンツァ
63. ヴェローナ
64. ヴィラ・フランカ・  
ディ・ヴェローナ
65. マントヴァ
66. ガッツオーロ
67. クレモナ
68. ピッツィゲットーネ
69. ロディ
70. メレニャーノ
71. ミラーノ
72. パビア
73. ボゲーラ
74. ガーヴィ
75. オタッジョ
76. ジェノヴァ

#### 付録 4. 天正遣欧少年使節 - 年表

- 1582年2月20日 - 長崎出帆。  
1582年3月9日 - マカオ到着 (約10か月滞在)。  
1582年10月5日 - 新暦(グレゴリオ暦)。教皇グレゴリオ13世、新暦を公布し、この日を新暦の10月15日と定む。10月4日(木曜日)の翌日は10月15日(金曜日)となる。  
(旧) 1582年12月31日 - マカオ出帆。  
(旧) 1583年1月27日 - マラッカ到着 (8日間滞在)。  
(旧) 1583年2月4日 - マラッカ出帆。  
(旧) 1583年 - セイロン島コロンボに到着。  
(旧) 1583年3月27日 - コモリン岬を通り、コスタ・ダ・ペスカリーア (インドの東南の海岸)に至る。この地に数日間滞在。この間、トリンシャドゥラ、マナパル及びトゥティコリンを訪問。  
(旧) 1583年 - 陸路、インド西海岸のクーランに至る。  
(旧) 1583年4月6日 - クーラン出帆。コチンに向かう。  
(旧) 1583年4月7日 - コチン到着。10月まで順風を待つ(約6か月滞在)。この地でアレサンドロ・ヴァリニャーノ、インド管区長としてインドに留まるべしとの指令に接す。  
(旧) 1583年10月30日 - コチン出帆。ゴアへ向かう。  
(旧) 1583年11月10日 - 数日後ゴアに到着 (数日間滞在)。  
(旧) 1583年11月14日 - ゴアにおいて新暦採用を決す。  
(新) 1583年12月12日 (旧 - 12月2日) - ヴァリニャーノ、ヌノ・ロドリゲスに訓令を発す。ヌノ・ロドリゲス、使節の担当者となる。  
(新) 1583年12月20日 (旧 - 12月10日) - ヴァリニャーノと別れ、コチンに向け、ゴアを出帆。  
(新) 1584年1月1日 - コチン到着。  
(新) 1584年2月20日 - コチンを出帆し、ポルトガルへ向かう。  
1584年3月9日 - 赤道通過。  
1584年5月10日 - 喜望峰通過。  
1584年5月27日 - サンタ・エレーナ島到着 (11日間滞在)。  
1584年6月6日 - サンタ・エレーナ島出帆。  
1584年8月<sup>1</sup> - ポルトガル王国到着。テージョ川に入ってリスボン近くのカスカイスに投錨し、一泊する。翌日<sup>2</sup>リスボンの港へ移動する (リスボンで25日間滞在)。  
1584年8月13日 - 枢機卿アルベルト・デ・アウストリアに謁見。  
1584年8月 - リスボン郊外のシントラに招かれる。シントラ近くのアルメイリンとペニャ・ロンガ修道院を訪問。  
1584年9月5日 - 陸路、リスボンのサオン・ロケを出発。  
1584年9月<sup>3</sup> - アルディア・ガレガ<sup>4</sup>とヴェンダス・ノヴァスを通り、モンテモールに到着。同地で一泊。

<sup>1</sup> 8月10日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>2</sup> 8月11日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>3</sup> 9月7日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>4</sup> 現在モンティージョ市 (Montijo)。1930年まで、アルディア・ガレガ(Aldeia Galega)と呼ばれていた。

1584年9月<sup>5</sup> - 早朝モンテモール出発。午前10時にエヴォラに到着（約7日間滞在）。  
 1584年9月14日 - 午後遅くエヴォラ出発。  
 1584年9月15日 - レドンドを通り<sup>6</sup>、午後ヴィラ・ヴィソーザ到着（4日間滞在）。  
 1584年9月18日 - ヴィラ・ヴィソーザを出発し、スペインに向かう。  
 1584年9月 - ポルトガル王国のエルヴァスを通り、スペインのバダホスよりスペイン王国に入る。  
 1584年9月 - スペインのメリダを通過。  
 1584年9月23日 - グアダルペに到着。  
 1584年9月25日 - グアダルペ出発。  
 1584年9月 - タラベラ通過。  
 1584年9月29日 - トレド到着（約20日間滞在）。  
 1584年10月19日 - トレドを出発し、マドリッドに向かう。  
 1584年10月20日 - マドリッド到着（約36日間滞在）。  
 1584年11月11日 - 国王フェリペ2世と共に、サン・ヘロニモ修道院で行われるスペイン皇太子宣誓式に参列。  
 1584年11月<sup>7</sup> - フェリペ2世に謁見。  
 1584年11月16日 - エスコリアルへ向かう。翌日サン・ロレンソ修道院に滞在。  
 1584年11月25日 - マドリッドでフェリペ2世、使節の宿舎イエズス会学院を来訪。  
 1584年11月25日 - マドリッド出発。アルカラ到着（約3日間滞在）。  
 1584年11月29日 - アルカラ出発。  
 1584年12月1日 - ヴィラレージョ到着。同地で一泊する。  
 1584年12月2日 - ベルモンテ到着（約2日間滞在）。  
 1584年12月5日 - ベルモンテ出発。  
 1584年12月10日 - ムルシア到着（23日間滞在）。ムルシアで1584年のクリスマスを過ごす。  
 1585年1月3日 - ムルシアを出発し、オリウエラを通る。  
 1585年1月4日 - エルチェ到着。  
 1585年1月5日 - 地中海側のアリカンテに到着（14日間滞在）。  
 1585年1月18日 - アリカンテでイタリア行きの船に乗船したが、逆風のため2度港に戻る。  
 1585年2月7日 - イタリアに向け、アリカンテの港を出帆。  
 1585年2月 - マヨルカ島のアルクーディアに到着（3日間滞在）。  
 1585年2月19日 - アルクーディア出帆。  
 1585年3月1日 - イタリアのリヴォルノに到着し、イタリアに入る。  
 1585年3月2日 - リヴォルノを出発し、午後ピサに到着（約5日間滞在）。  
 1585年3月7日 - ピサを出発し、フィレンツェに至る（5日間滞在）。  
 1585年3月13日 - シエナ到着（約5日間滞在）。  
 1585年3月17日 - シエナを出発し、サン・クイリコに至る。

<sup>5</sup> 9月8日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>6</sup> 『Livro 4o. de D. João I』に記されている情報によると、1418年より、国王ジョアオン1世の命令によって、エヴォラからヴィラ・ヴィソーザまでの道を通る場合、このレドンド村を経なければならなかったため、天正遣欧少年使節がこの村を通った可能性は非常に高いと考えられる。

<sup>7</sup> 11月12日か14日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

- 1585年3月20日 - アクアペンデンテとボルセナを経てヴィテルボに到着し、一泊。
- 1585年3月21日 - ヴィテルボを出発し、カプラローラに至る。
- 1585年3月22日 - 午後遅くローマに到着（約70日間滞在）。
- 1585年3月23日 - 朝、ローマ教皇グレゴリウス13世に謁見。
- 1585年3月25日 - 受胎告知の祝いのため、教皇と共にサンタ・マリア・ソプラ・ミネルヴァ教会を訪問。
- 1585年4月4日 - 教皇とのプライベートな謁見。
- 1585年4月7日 - 教皇グレゴリウス13世と共に「聖なる犠牲」<sup>8</sup>に出席。
- 1585年4月10日 - ローマ教皇グレゴリウス13世没す。
- 1585年4月21日 - 枢機卿による後継者選びのコンクラーヴェが行われる。
- 1585年4月25日 - フェリーチェ・ペレッティ枢機卿、シクストゥス5世として選ばれる。
- 1585年4月27日 - 使節団、新教皇シクストゥス5世に謁見。
- 1585年5月1日 - 使節団、サン・ペドロ大聖堂で行われた教皇の戴冠式に出席。
- 1585年5月29日 - ローマ市民会に招かる。
- 1585年6月2日 - 教皇シクストゥス5世に帰国の挨拶をする。
- 1585年6月3日 - ローマ出発。同日チヴィタ・カステラナで宿泊。
- 1585年6月4日 - チヴィタ・カステラナを出発し、ボルゲット<sup>9</sup>を通る。
- 1585年6月5日 - ナルニを通り、テルニに至る。
- 1585年6月7日 - スポレト、フォリニョ、アッシージを通り、ペルージャに至る。
- 1585年6月10日 - ペルージャ出発。その後、コルフォリート、カメリーノ、トレンチノ、マチェラタ、レカナティを通る。
- 1585年6月12日 - ロレートに至る。
- 1585年6月14日 - ロレート出発。
- 1585年6月15日 - アンコナで宿泊。
- 1585年6月16日 - セニガッリア、ファーノを経て、ペザロに至る。ペザロで宿泊。
- 1585年6月17日 - リミニ、チェゼナを経て、フォルリに至る。フォルリで宿泊。
- 1585年6月18日 - イモラに至る。
- 1585年6月19日 - ボローニャ到着。
- 1585年6月22日 - ボローニャ出発。同日フェッラーラに至る（3日間滞在）。
- 1585年6月25日 - フェッラーラを出帆し、ポー川からキオッジャに至る。
- 1585年6月26日 - キオッジャを出帆し、ヴェネツィアに至る。
- 1585年7月6日 - ヴェネツィア出帆。バキリョーネ川を上り、パードヴァに至る。
- 1585年7月9日 - パードヴァを出発し、ヴィチェンツァに至る。
- 1585年7月10日 - ヴィチェンツァを出発し、ヴェローナに至る。
- 1585年7月14日 - ヴェローナ出発。ヴィラ・フランカ・ディ・ヴェローナを経て、マントヴァに至る。
- 1585年7月18日 - マントヴァ出発。ガッツオーロを通過してクレモナに至る。
- 1585年7月19日 - クレモナ出発。ピッツィゲットーネを経てロディに至る。
- 1585年7月25日 - ロディ出発。メレニャーノを通過してミラーノに到着（8日間滞在）。

<sup>8</sup> 英語で「Holy Sacrifice」。

<sup>9</sup> 1585年6月5日、ナルニで記された手紙に出てくる名前。現在の位置は決定的でない。



- 1585年8月3日 - ミラーノ出発。パビアの近くのカルトジオ修道院で宿泊。
- 1585年8月4日 - パビアで宿泊。
- 1585年8月5日 - パビアを出発し、ボゲーラに至る。
- 1585年8月6日 - ガーヴィとオタッジョ<sup>10</sup>を通り、ジェノヴァに到着。
- 1585年8月8日 - ジェノヴァで乗船し、翌日出帆。スペイン王国へ向かう。
- 1585年8月16日 - スペイン王国のバルセロナに到着（25日間滞在）。
- 1585年9月9日 - バルセロナを出発し、モンセラートに到着。
- 1585年9月11日 - モンセラート出発。
- 1585年9月14日 - モンソンに至り、国王フェリペ2世に謁見。フェリペ2世に帰国の挨拶をする。
- 1585年9月 - モンソン出発。
- 1585年9月 - サラゴサとアルカラを経て、マドリッドに至る。
- 1585年9月 - マドリッドを出発し、オロペサを経てポルトガル王国に入る。
- 1585年10月 - ポルトガルのヴィラ・ヴィソーザに到着（4日間滞在）。
- 1585年10月<sup>11</sup> - エヴォラ到着（9日間滞在）。
- 1585年<sup>12</sup> - エヴォラ出発。アルカセル・ド・サルで宿泊。
- 1585年11月 - アルカセル・ド・サルを出発。テージョ川を渡り、リスボンに戻る。
- 1585年12月 - リスボンを出発し、コインブラに向かう。テージョ川から船でサンタレンに至る（数日間滞在）。
- 1585年12月 - サンタレンを出発し、トマール<sup>13</sup>に至る。
- 1585年12月23日 - コインブラ到着（20日間滞在）。1586年のクリスマスはコインブラで過ごす。
- 1586年1月9日 - コインブラ出発。バタリャとアルコバサを訪れ、リスボンに向かう。
- 1586年4月12日 - リスボンを出帆し、日本へ向かう。
- 1586年5月6日 - 赤道通過。
- 1586年5月26日 - 台風に遭遇。
- 1586年7月7日 - 喜望峰通過。
- 1586年8月18日 - アンゴシャ島<sup>14</sup>に至る。
- 1586年8月31日 - モサンビーク入港。翌年3月までモサンビークで順風を待つ。
- 1587年3月15日 - ゴアに向け、モサンビークを出帆。
- 1587年 - ソマリアのモガディシュに至る（12日間滞在）。
- 1587年5月28日 - ゴア近くのレシフェス・ケイマドスに至る<sup>15</sup>。
- 1587年5月29日 - ゴア到着（11か月滞在）。
- 1588年4月22日 - アレサンドロ・ヴァリニャーノと使節団、ゴアを出帆。
- 1588年7月1日 - マラッカ到着（12日間滞在）。
- 1588年7月13日 - マラッカ出帆。
- 1588年8月11日 - マカオ到着（約2年間滞在）。

<sup>10</sup> オタッジョ(Otaggio)はリグリア語。イタリア語で ヴォルタッジョ(Voltaggio)と言う。

<sup>11</sup> 10月11日或いは12日と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>12</sup> 10月或いは11月と推測できるが、確かな証拠は残っていない。

<sup>13</sup> 天正少年使節の訪問の時、この町はナバンシア(Nabância)と呼ばれていた。

<sup>14</sup> Angoxá 或いは Angoche。位置は決定的でない。

<sup>15</sup> Recifes Queimados 或いは Ilhéus Queimados (ポルトガル語)、通称 Vengurla Rocks 或いは Burnt Islets (英語)。

1590年6月23日 - マカオ出帆。

1590年7月21日 - 長崎に帰着。